
帝国の皇子達

秋山らあれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国の皇子達

【Nコード】

N8346D

【作者名】

秋山らあれ

【あらすじ】

ルウィーラの狂気は、アルデイスから笑顔を奪い、無邪気さを奪い、表情までをも奪った。あの呪詛の言葉を、彼は幾度母親の口から聞かされたのだろう……。『最後の王子』過去篇。（完結済み）

1・第四皇子の独白（1）

何時の世も、戦は多くの男達の命を奪い、多くの女達を過酷な運命へと突き落とす。

戦に伴侶や子を取られた挙げ句に殺され、取り残される女達。攻め込まれ、幾人もの飢えた敵兵達に陵辱され、死ぬよりも辛い屈辱を舐めさせられた末に惨たらしく殺される女達。又は、そうなる前に舌を噛み切るか、高みから飛び降りるか、刃物で喉を突く事を選ぶ女達。良く研がれた刃物を懐にしている女は、幸いであろう。そして……、戦の戦利品とされる女達……。死ぬ事も許されず、己の総てを破壊し奪った男の前に“物”として差し出される。私の父は、そうして責め滅ぼした三国の王女達を、領土と共に帝国の物とし己の物とし、子を産ませた。

三人めの高貴な戦利品に出会った日の事を、私は鮮明に記憶している。私はまだ四つの子供であり、いつもの様に目付役の目を盗み、独りで帝城の広大な庭々を探検していた昼下がりの事だった。追って来る目付役や、侍女達かしずきの目を盗み、私はその頃気に入って頓に足を運んでいた遊び場へと、その日も足を運ぼうとしていた。そこは使われていなかった小さな離れの館であり、その頃の私は、隙を見ているその庭で独り遊びをしたものだった。しかし普段なら人の姿などほとんど見られないその離れ周辺が、どうした事かその日は衛兵達の姿がやけに多く、いつもは難無く辿り着く筈のその庭も、その日は遠く感じられた。そして誰にも見付からぬ様、姿を隠しながら

漸く辿り着いた気に入りの遊び場が、最早己の物では無くなった事を知った。

私は植え込みの下に潜り込み、暫く様子を伺った。いつもは閉じられている館の扉が開け放たれており、やはり衛兵達がいる。そして館の程近い処に幾人かの侍女達かしずきの姿があり、その中心には見た事も無い女がいた。そして細い歌声が流れていた。

女は、籐製の異国風の椅子に身体を預け、異国語の唄を唄っていた。その衛兵達の数の多い事と、かしづく者達の様子から、身分ある姫なのだろうと幼いながらに思ったものだが、今なら分かる。たかが小さな離れを警備するにしては多すぎる衛兵の数、あれは警備というよりも、あの囚われの姫の見張りであつたのだと……。

私はその身分あるらしき姫に興味を覚え、茂みの下を獣の仔さながら這い回り、彼女に近付こうとした。彼女の顔を良く見たかったのだ。子供特有の好奇心から、私は慎重にゆつくりと、その姫の顔が見えるところまで移動し、そして子供心に驚いた。彼女は細く、色白で、金色の豊かな髪は緩やかに編まれ肩から胸へと垂れ、膝の上まで落ちていた。そして庭園の花々を見詰める瞳が、涙を流していた。嗚咽を洩らすでも無く、顔を歪めて泣くでも無く、ただ唄を口ずさみながら静かに涙を流す彼女の顔は、儚く、そして美しかった。彼女の横顔と彼女の口ずさむ淋し気な旋律は、子供であつた私の心を哀しくさせた。

あの時、どれ程の間彼女の顔を見詰めていたのだろう……。
。すっかり彼女に気を取られていた私は、突然目の前に落ちて来た毛虫に、思わず声を上げかけた。実際には声など上げなかったのだが、派手に身動きをした為にもぐり込んでいた茂みも大きく揺れたのだろう、気付かれてしまった。

「何者だっ！

鋭い誰何の声が起こると共に、衛兵達があつという間に私が潜んでいた植え込みの辺りを取り囲んだ。私は、多少極りが悪い思いを

しながらも、その場から這い出した。

「殿下．．．．．」

衛兵達も、侍女達も呆気にとられていた。

「殿下．．．．．？」

数瞬を置いて起こった細い声に首を巡らしてみると、件の姫が涙も拭かずにこちらを見詰めていた。私は土で汚れた衣服を払いもせず、その姫に近付いた。

「どうしてないているの？」

私が唐突に尋ねると、彼女はその時初めて己が泣いていた事に気付いた様な顔をし、涙を素早く拭った。そして言葉を探す様な素振りをし、やがて口を開いた。

「悲しいから．．．．．」

彼女はそう答えて微笑んだ。

「どうして？」

子供というのは無邪気であり、それ故に残酷だ。大人の邪気ある残酷さとは違って憎む事の出来ない分、質が悪い。

「独りぼっちだから．．．．．」

その涙の訳を口に出来なかつたらしい彼女は、私にそう答えた。

「さびしいのか？さびしいなら、あしたもわたしがきてあげるよ」

自分でも信じ難い事に、彼女の言葉を信じた当時の私は、そんな事を言ったのだ。残忍な皇后の血を引く皇子にも、無邪気な時代はあつたというわけだ。

彼女は再度微笑み、傍らで戸惑いの表情を浮かべていた侍女や衛兵達を手振りで遠ざけた。

「貴方は、一番下の皇子様ね？」

私は頷いた。

「あなたはだれだ？」

「わたくしはシルキアのルウィーラ」

彼女はそう名乗った。

シルキア王国――その前の年に、帝国が侵略し滅ぼした王国であつた。彼女はそのシルキアの王女であつた。帝国が勝利の証として、命を保障するのと引替えに連れて来た姫であつた。その年、シルキア大公の称号を与えられた皇太子が、ゆくゆくは娶る事になっていた姫であつたが、女癖の悪い父がさつさと手を付け己のものとしてしまった。もっともルウィーラと長兄との間には五つの年の差があつた。その頃既に年頃であつた彼女に対し、長兄はまだ十一であり、成人までにはまだ間があつたのだ。そんな娘に父が手を付けないわけは無い、しかも美しい姫だ。初めて会つた時、彼女は既に父の子を身籠つていた。身籠つた故に、あの離れを与えられたのだつた。

「シルキアは、もうなくなつたんでしょう？」

私の残酷な問いに、ルウィーラは、哀し気な微笑みを浮かべ頷いた。

「貴方のお国に攻め滅ぼされました。けれどシルキアは無くなつても、わたくしはシルキアの王女なのです、小さな皇子様」

その時、私の胸はちくりと痛んだ。目の前の姫が俄に哀れに思えて来たのだ。

「わたくしは、戦利品なのです。お父上がわたくしの国を滅ぼした、その証の品なのです……わたくしは……」

ルウィーラは手を伸ばし、私の髪に付いた葉やごみを取りながら、又衣服の汚れを払いながら、静かに語つた。私の実の母である皇后は、間違つてもそんな事はしなかつただろう……。子の髪や衣服に付いた汚れを払つてやるなどという事は……。

私とルウィーラの邂逅は、その日の内に父の耳に入っていたであ

ろう。少なくとも母の耳には届いており、私付きの守役や侍女達はこつぴどく咎められたようであった。そして母は私に、ルウィーラの元へ行く事を禁じた。人一倍恪気（こくけ）の感が強い母は、己が息子が娶る前に己が夫により孕まされたルウィーラを酷く憎んだ。母はさぞルウィーラに毒を盛りたかった事だろう。だが戦利品である姫を殺すわけにはいかない事を、母は愚かなりにも理解していた様だ。

私は、母に禁じられたにも拘らず、翌日もルウィーラの元を訪れた。彼女はやはり、庭園で泣いていた。

「また、なっていたの？シルキアのおひめさま？」

「あら、本当ね、また泣いていたわ．．．」

何でも無い事の様に言つて、彼女は儚い微笑みを浮かべた。

「本当に来て下さったのね、エドキス皇子」

「うん、やくそくしたからな」

約束とは守るものだ、その頃の私は本気で信じていたのだ。思ひ出す度に、笑いがこみ上げて来る。約束など、相手を欺く為にするものだ。私は成長するにつれ、本能的にそれを学んだ。

「ねえエドキス皇子、ここにお出でなさいな」

そう言つてルウィーラは両手を伸ばして私を抱き上げると、膝の上に乘せた。物心付いてから以来、^{このかた}実母は無論の事、乳母や侍女達にでさえそんな事はされた事の無かった私は、酷く戸惑い、何と言つて良いかも分からなかった。身体を堅くして緊張する私の頭を、彼女は優しく撫でた。

「ありがとう、エドキス皇子。いらして下さつて嬉しいわ」

ルウィーラは本当に嬉しそうに微笑んだ。

その翌日も、私はルウィーラをおとない、再び母の咎めを受けた。今でこそ分かるものの、幼かった私には、何故母がルウィーラをおとなう事を禁じるのかが理解出来なかった。

『あの様な遊び女をおとなうなど言語同断じゃ』

母が顔を怒りに歪め、吐き出したその言葉の“遊び女”の意味を知るには、当時の私は幼過ぎた。只々母の言葉が理不尽に思え、私は父である皇帝に訴えた。ルウィーラの元をおとなう許しを、私は父に願い出たのだ。

『ルウィーラが厭わぬならば良い』

それが父の言葉であつた。父はあつさりと許しをくれた。母は抗議したが、皇帝である父に従わないわけにはいかなかった。それからというもの、私はほぼ毎日、彼女の元を訪れる様になったのだ。

その頃のルウィーラは臥せている事も多かった。今思えば、悪阻^{わり}が酷かつたのだらう。ある日彼女は私に、病では無いのだと嘔んで含める様に言つた。もしかしたら私は、酷く不安気な顔をしていたのかもしれない。寝台の中にいた彼女は、私を広い寝台の上に引っ張り上げると、さも重大な事を打ち明けるかの様に私に言つたのだ。

「わたくしのお腹の中には、貴方の弟か妹がいるのですよ」・・・と。

微笑んでいながらも、彼女の顔が酷く悲しそうに見えたのは気のせいでは無かつただらう。私は、ルウィーラの言葉をすんなりと受け止めた。母の異なる兄弟に疑問を抱く事は無かつた。私には母の異なる兄弟達がすでにいた事もあり、そういうものだと思つていたのだ。

「わたしは、おとうとがよいな。そうしたら、いっしょにけんけいこができるし」

「貴方がそう仰るなら、男の子が生まれる様、女神に祈りましよう」

彼女はあの時、どんな思いであの言葉を言つたのだらう・・・

。恐らく男子など望みはしなかったであろうに。この帝国で後ろ盾の無い母の元に生まれた皇子皇女が、どれ程軽んじられるか、ルウィーラは知っていた筈である。皇女ならまだ良い。そうそう表に出て来なくとも許される。政略に使われるその時まで、それこそ城の奥深くに隠^{こも}つていようと、問題にこそならない。それどころか、箱入りの姫として利点にこそなるだろう。だが男子ではそうもいくまい。帝家男子が、政に顔を出さないわけにはいかない。いかに軽んじられようとも。

ごく単純にしか物事を考えられなかった子供の私は、純粹にルウィーラの子の誕生を心待ちにした。彼女の細過ぎる程の身体の腹部のみが日に日に大きくなって行く様子を、己が弟が元気に育っている証なのだと純粹に喜んでいた。あの頃はまだ、ルウィーラが父を、帝国を、死ぬ程憎んでいた事実を知らなかったのだ。

「この子が生まれたら、守ってあげてね。お願い、エドキス皇子」
産み月が近づくに連れて、それがルウィーラの口癖になった。その度に、私はこう答えた。

「ずっとまもるって、ちかうよ、ルウィーラひめ」

麗しい兄弟愛など、この帝家にあつては冗談の様な話だ。ほんの子供であつたとはいえ、自分が嘗てあんな誓いをしたのかと思うと、やはり笑いがこみあがる。

亡国の王女はその後、月満ちて皇子を産み落とした。

1・第四皇子の独白(2)

アルデイス・ユーリディン

亡国シルキアの王

女が産み落とした子は、そう名付けられた。成長してから知った事だが、赤子の命名に関して父は全く関与しなかった。それだけでも父がシルキア王家の血を引く赤子にどれだけ無関心であったかが分かる。国土を帝国に併合されたシルキアの民達の手前、父はシルキア王家の血を帝家に入れたが、ただそれだけの事であった。

“アルデイス”の名は、大聖堂の祭司により付けられたものであったが、“ユーリディン”の名を付けたのはルウィーラであった。シルキア風の名であった。シルキアの民達の感情を慮り、父は末の息子にシルキア風の名を付ける事を許したのである。

「ねえ、ルウィーラひめ、“ユーリディン”って、どんないみ？」
赤子が名付けられて間も無く、私は尋ねた。

“ユーリディン”は、シルキア王国建国の祖の名、最初の国王の名よ」

彼女は赤子をあやししながら、そう教えてくれた。建国の祖の名を、その王家最後の王子に付けたルウィーラは何を思っていたのだろう。何か深い期待があつての事だったのか、もしくは……彼女特有の哀しい洒落でもあつたのか……。

ルウィーラは赤子を“ユーリ”という愛称で呼んだ。自然私も、ルウィーラの前では赤子をその名で呼んだ。彼女はよく赤子に唄を唄って聴かせていた。私が初めて彼女を垣間見た時に唄っていた、

あの異国語の唄だ。

「シルキア王家に生まれた者は皆、この唄を子守唄替わりに聴かされて育つ。この唄は遠い昔から王家に伝わって来た唄なの」

シルキアの古語で唄われているというその唄を、ユーリと共に散々聴いている内に私もすっかり覚えてしまった。意味も知らぬそのシルキアの古語を、もの哀しい旋律に乗せて、幼い頃は私も唄った。

広き蒼き空の果て 涙無き地 そこに有り

涙無き地の その園の 白き花の開くるを

白き鹿は 良く守りて

白き娘 空に向かいて 花を恋ひ

幸ひの地 求め出でたらむ

白き花々 咲き乱れたる 白き園

その地を守るは 白き鹿

鹿の瞳は常しえに 花を思はむ 花を思はむ

後にルウィーラはその唄の意味を覚えてくれたが、この通り、存外大した意味の唄では無かった。

幼い頃のアルデイスの世界は、実に狭かった。あの離れの館が、彼の世界の総てであり、母であるルウィーラと乳母と数少ない侍女かしずき

達と教師、そして私だけが彼の世界の住人であった。

“母上”という言葉の次にアルデイスがたどたどしく覚えたのは、私の名だった。それが“エー”であったり、“エド”であったり、“エドキー”であったり、“エドキチュ”になったり、毎回違った名を呼ばれたが、小さな両手を伸ばし上機嫌で私の名を呼ぶ幼いアルデイスが、可愛く無い筈は無かった。あの無愛想な弟を考えると、本当にそんな頃があつたのかと、疑いたくなつて来る。そのアルデイスが“父親”の意味を知つたのは、確か四つを過ぎてからだつたと記憶している。人間であろうが、動物であろうが、誰にでも父親というものがいるという事実を、彼はその歳まで知らなかった。無論その歳までには、彼も年に幾度かは父である皇帝に対面している。だが、碌に口をきいた事も無い、声をかけられた事も無い男が父だという実感など、持てる筈など無いのだ。彼よりも多く父と接する機会を持っていた私でさえ、皇帝が我が父だという実感は無かった。皇帝を世間一般の父親像の枠に当てはめる事は出来ない。むしろ私を後見していたブラコフ・ダウゼント候の方が、どれ程私にとっては父と呼ぶに相応しかったか……。

アルデイスは“父親”の意味を知った時、自分の父親は誰なのか、何処にいるのかと母親に尋ねた。その時のルウィーラの衝撃を受けた表情はよく覚えている。今にも泣きそうな顔をして、部屋を飛び出していつてしまった。アルデイスは驚き、戸惑い、私に助けを求めた。

「お前は今まで、父上が誰だか知らなかったのか？」

私の問いに、アルデイスはおずおずと頷いた。恐らく、叱られるべき悪い事をしでかしたとでも幼心に思ったのだろう、アルデイスは上目遣いに私を見上げていた。

「お前と私の父上は皇帝陛下だ。もう何回も会った事があるだろう？」

私の答えに、幼いアルデイスは少しの間考え、首を傾げた。

「あのえらいひと？おおきいすにすわってるひと？」

「うん、大きい椅子に座ってる人」

アルデイスは、今一つ納得のいかない顔をした。

「ぼく、あのひとじゃないとおもう……」

「どうして？」

「だって、ははうえはあのえらいひとのこと、きらいだもん」

何の裏も無い幼いアルデイスの言葉に、私は驚き、言葉が続かなかった。そうだ、国を滅ぼされたルウィーラが皇帝に好意など持てる筈が無いのだという事を、私はその時初めて強く実感したのだ。そして恐ろしい事に思い当たり、胸が苦しくなった。私は皇帝の子だ。彼女にとつては敵の、憎い男の息子だ。ルウィーラが私の事も嫌っていたらと考えたら、目の前が暗くなった。実の母に厭われようと、他の誰に嫌われようと私は構わなかったが、ルウィーラにだけは嫌われたく無かったのだ。

「エドキス？どうしたの？エドキス？」

アルデイスが、愕然としていた私の衣服を心配そうに引っ張った。

「あ……、何でも無い」

私は幼いアルデイスの両手を取り、その邪気の無い瞳を真っ向から見詰めた。

「なあ、ユーリ。ルウィーラ姫が皇帝の事をきらいでも、あの人はお前の父上なんだ。一応おぼえておいた方がいい」

アルデイスは、素直に頷いた。

アルデイスが七つになった時、帝国は、隣国エスニアへ彼を人質として差し出す事を決めた。その後帝国に責め滅ぼされる事になるエスニア王国は当時、国土こそ帝国には及ばなかったものの、その

豊富な天然資源の採掘により国は潤っており、軍事力の方も無視出来ぬ程の物を持っていた様だ。そのエスニア王国とクルトニア帝国、両国間で不可侵条約が結ばれ、互いの牽制の為、人質の交換が行われる事になったのだ。

ある日の昼下がり、いつもの様に離れの館に足を運ぶと、ルウィーラが床に座り込み長椅子に突っ伏して、声を上げて泣いていた。アルデイスの乳母がその背を撫でながら、やはり涙を拭きつつ何か話しかけていた。アルデイスは困惑顔でその様子に目を向けたままで立ち尽くしていた。人質の件など、その時はまだ知らなかった私は驚き、ルウィーラの元に駆け寄ると屈み込んだ。

「何があつたんだ？ルウィーラ姫？」

髪を振り乱して泣くルウィーラが、私に気付き顔を上げた。だが言葉も口に出れない程取り乱しており、私は何も聞かずに、ルウィーラをぎこちない手付きで抱き寄せた。ルウィーラは私に縋り付き泣き続けた。そしてやがて泣き疲れて私に縋り付いたまま眠ってしまった。私はその後、人質の件を乳母の口から聞いた。

「くそっ！ユーリ、一緒に来い」

私はアルデイスの腕を掴むと、その場を飛び出した。

「どこへいくの？」

「皇帝の処だ。何もお前が行かなくなつていいはずだ」

私は、アルデイスを連れて父の執務室へ出向くと、従者に取り次ぎを命じた。だが腹立たしい事に、父は私に会おうとはしなかった。戻って来た取次人は私に伝言を求めるばかりであった。堂々巡りの押し問答に私は業を煮やし、取次人を押しのけて強引に執務室に踏み込んだ。衛兵達が止めに入ってきたが、さすがに皇太子に次ぐ帝位継承権を持つ私に、強い態度は取れなかった様だ。

「先程から騒がしいな、一体何の用だ？」

執務中であった父は、ペンを止め、不機嫌な顔を上げると私とア

ルデイスに目を向けた。アルデイスを連れていた時点で、父は私の訴えんとしている事を察した様であった。

「エスニアの人質の件か？」

「はい」

私とアルデイスは跪き、頭を垂れた。

「恐れながら、エスニアへはアルデイスの代わりに私をお送り下さい。お願いします」

「エドキス……」

アルデイスは驚いたらしく、顔を上げて私に目を向けた様であったが私は顔を上げなかった。父が苛立たし気に息を吐く気配が伝わって来た。

「それは出来ぬ、そなたは皇太子に次ぐ帝位継承権を持っている」

「では、他の者をお送り下さい」

「何故に？」
なにゆえ

「アルデイスはまだ七つになったばかりです。何もこんなに幼い子を送らなくとも良いではありませんか、陛下」

「もう七つであろう」

私は思わず顔を上げ、実の父を睨みつけていた。

「だがまだ七つだ。皇子皇女達の中で一番役に立たぬのがそれだ。人質に送り出すくらいしか使い道が無い」

「父上……」

私は怒りの為に拳を強く握り締めながらも、必死でそれを押さえ、再度深く頭を下げた。

「お願いします。ルウィーラ姫からアルデイスを取り上げる様な事はなさらないで下さい」

「他の妃の子を代わりに送れというか？」

「私をお送り下さい。帝位継承権は放棄させて頂きます」

「身勝手な考えだ」

「壊れてしまいます」

「何？」

「ルウィーラ姫が、壊れてしまします」

「下らぬ戯言は聞く耳持たぬ」

「戯れ言ですか．．．．．？．．．．．父上には戯れ言でも、私にとつてはそうでない。父上は、ルウィーラ姫がどんな生活を送っているかをご存じないからそんな事を仰るんです。父上が捨て置いて顧みない姫にとつて、アルデイスは総てなんです。そのアルデイスを取り上げたら、ルウィーラ姫は、きつと壊れてしまう」

父は眉間を押さえながら深々と溜息を吐いた。

「なれば壊れぬ様、そなたが慰めてやればよかるう、エドキス。さあ、もう下がれ。余は忙しい、これ以上邪魔立てすると、承知せぬ。誰か、子供等を連れて行け」

．．．．．この時程、父を憎んだ事は無かったかもしれない。

執務室から追い出された私は、アルデイスの手を握ったまま暫く何も言えなかった。そんな私を、アルデイスは心配そうに見上げていた。

「ごめん、ユーリ．．．．．変わってやれなかった．．．」

アルデイスはにこりと微笑み、首を横に振った。

「ありがとう、エドキス、でもぼくはだいじょうぶ。ははうえもエドキスがいればだいじょうぶだとおもうよ」

本当に．．．．．本当に大丈夫だろうか．．．．．私は案じた。

本気でルウィーラ姫が壊れてしまうと、案じた。

そして．．．．．、その通りになった．．．．．。

1・第四皇子の独白(3)

幼いアルデイスは、エスニアへ人質として送られた。ルウィーラの嘆きは、私にとって拷問以外の何ものでもなかった。出発の日も、彼女は酷く取り乱し、アルデイスの身から彼女を引きはがすのに、侍女達は随分と手間取り、挙げ句の果てには衛兵達が彼女の身を押しさえつけないければならない始末であった。子を取り上げられたルウィーラは、この世の終末を見たかの様に泣き叫んだ。母親の激しい慟哭に、これから人質としてエスニアへ送られんとしていたアルデイスは、幼いながらも心配そうな顔で幾度も母親を振り返った後、館を後にした。

「ははうえ．．．、かわいそう．．．」

アルデイスは沈んだ表情で私を見上げ呟いたが、泣いてはいなかった。

「そうだな．．．」

可哀想．．．、全くだ。ルウィーラもアルデイスも、全く持つて“可哀想”だった。ルウィーラには、本当にアルデイスが総てだったのだ。彼女には、アルデイスが唯一の生きる為の理由だったのだ。例えば、私が人質として他国へ差し出されるとして、実母であるあの皇后が、ルウィーラの様に我が子の為に身も世も無く嘆き悲しむだろうか？答えは否だ。己が駒を奪われる危険に、皇后は怒り狂うであろうが、決して子の命を案じて泣き叫ぶ様な真似はしまし又、父の他の側室達にしても、ルウィーラの様な脆さは無い。恐らくは、子を案じ、悲しみはしたのであるが、ルウィーラのように正気を失う事は無かっただろう。ルウィーラは、弱い女だったのだ。彼

女の心は、硝子の様に、いやそれ以上に、あまりにも脆く壊かったのだ。私の父は、興味本位にうら若かったルウィーラに手を出し、孕ませた挙げ句、全く顧みなかった。本当ならば長兄の妃に．．．、皇太子妃となる筈であつたルウィーラを、あの様な低い地位に貶めた。

私は、手を伸ばしアルデイスの頭を撫でた。本当ならば、皇太孫となるべき皇子であつたかもしれない。

「必ず戻つて来いよ、ユーリ」

「うん」

頷く幼い弟を、私は背を屈めて抱き締めた。アルデイスを抱き締めたのは、この時が最後であつたと思う。

館へ取つて返した私の姿を認めるや、ルウィーラは侍女達の手を振り切り泣きながら私に縋り付いた。

「何故ユーリなのっ！？何故あの子なの！？何故他の皇子か皇女じゃないの！？何故っ！？」

ルウィーラは私のチュニツクを破れんばかりに掴み、喚き散らし、そのまま床に頽れた。私は己のチュニツクを掴むルウィーラの両手をそれぞれ握り、悲痛な泣き声を上げるルウィーラの震える肩を見詰めたまま立ち尽くしていた。

そして、やがて泣き喚く事に疲れた彼女は、表情の無い顔でぼんやりと私を見上げ、呟いた。

「何故．．．、貴方じゃないの．．．．．？」
胸を抉られる様な呟きだった。

思えば、彼女の狂気はその日から始まっていたのだろつ。ルウィーラは、少しずつ常軌を逸していった。本当に少しずつ．．．．．

。 毎日泣き暮らしていた彼女は、やがて泣かなくなった。少しずつだが笑顔を取り戻したルウィーラに、侍女達は胸を撫で下ろし、私もほっとしていた。だが彼女が泣かなくなったのは、悲しみが薄れたからでは無く、エスニアに送られたアルデイスの存在が彼女の心から拭い去られたからであつた。彼女の心からは、いつの間にか人質に送られたアルデイスはいなくなり、そして私の存在も消えていた。彼女の中では、アルデイスは常に彼女の傍におり、彼女は私の名を忘れた代わりに、私をユーリと呼んだ。

。 幾度説明したか分からない。私はユーリでは無いのだと。 . . . だが、最早彼女の耳にはそんな私の言葉も届かなくなっていた。そして彼女は、一日でも私が姿を見せないと酷く取り乱す様になった。私の姿が見えないのは、父のせいだという思考に繋がつたのだろう、父への呪詛の言葉を吐き散らす様になった。父に対して吐かれた憎しみの言葉が、父に対する物だけでは無くなるまでに然程の時間はかからなかつた。ルウィーラは父を憎み、帝家を憎み、拳げ句は帝国を憎んだ。否、こうして気が触れるまで、私の前では口にする事が無かつたとはいえ、彼女はずっと憎んで来たのだろう。国を奪われた彼女が、父を、帝家を、帝国を、憎まずにいられた筈など無かつたであろうから。 . . . 。

「あの男を、呪つてやる！呪つてやる！クルトニアを呪つてやるっ！死んでしまえっ！死んでしまえっ！」

ルウィーラが長い髪を振り乱して、喚き散らしていた。侍女達は今一ついい加減宥める気力も失なつたのだろう、只、傍観するだけであつた。

「帝家の人間など、皆呪われるが良いっ！あの男の血筋など、死に絶えてしまえっ！」

己が息子も、その男の血筋だという事実、彼女の中では最早事

実では無くなつたのであろうか．．．。

「ユーリ．．．、ああ、ユーリ」

ルウィーラが私の姿を見付け駆け寄つて来るや、私を抱き締めた。すでに彼女と同じ程に背丈の伸びていた私を、アルデイスと信じて疑わなかった彼女の狂気は、己が息子の年齢さえも忘れ去らせたのだ。

「ユーリ、わたくしのユーリ、あの男に連れ去られていたのね、可哀想に、酷い事をされなかったか？」

そう言つて、彼女は私の無事を確かめるかの様に、私の全身を狂気の宿つた瞳で幾度も見回し、私の髪を掻き揚げる様にして幾度も幾度も私の頭を撫でた。

「何もされていないよ、大丈夫。昨日は皇后の生誕の式典があつたんだ。」

「皇后．．．？」

「私を産んだ母だよ」

「何を言っているの？この子は．．．。そなたを産んだのは、このわたくしではないの。それはそれは苦しい思いをして、わたくしはそなたを産んだのですよ」

「ルウィーラ姫．．．」

「皇后などの．．．帝家の人間などの式典に出ていたのですか？そなた？．．．。ああ、あの男に強制されたのね？」

確かに強制はされた。母の生誕式典など、出なくてすむなら出たくなど無い。己自身の生誕式典も含め、ああいった類いの式典が、私は大嫌いだつた。

ルウィーラが再び私を抱き締めた。ルウィーラのしたい様にさせてやつた。

「可哀想に、可哀想に．．．。」

「声が、涸れているね、姫」

「可哀想に．．．。」

「もう、喋らない方がいい、ルウィーラ姫」

私が訪れなかった間、ずっと喚き散らしていたのだろう．．．．
．．。私は、ルウィーラ姫の華奢な肩に顔を埋め、その背に手を回
した。こんな母親を見たら、アルデイスは何と言っだろう．．．．
．．．．壊れてしまった母親を見たら．．．．．．アルデイス
は．．．．．．。

私は、父を恨んだ。

1・第四皇子の独白(4)

凡そ一年半余りの後に、アルデイスは帝国に帰還した。

一歩間違えばエスニアで処刑されていてもおかしくは無い状況下に置かれた彼が、無事に帰還した事は奇跡に近かったかもしれない。帝国が両国の不可侵条約を犯し、エスニアへ攻め入ったのである。父と兄は、初めからそのつもりであったのだろう。初めからエスニアを落とすつもりで、相手国を欺く為にアルデイスを人質として送ったのだろう。

帝国軍は、侵略の火蓋を切って落とすと同時にアルデイスを奪い返した。よくぞ奪い返せたものだ。この時ばかりは、軍を率いた長兄とその参謀に感謝したものだ。

私も前線では無かったが、この侵略戦争に参加した。ルウィーラの元を離れるのは本意であったが、父である皇帝の命に逆らう事など出来よう筈も無い。私は戦場でアルデイスと再会し、エスニア陥落後、帝国へ連れ帰った。

ルウィーラ姫が発狂した事を、私はアルデイスに話した。だが、それがどういう事なのか未だ九つの彼には、はっきりとは分からなかっただろう。

私は、事実を知らせるだけ知らせると、アルデイスをルウィーラの元へと連れて行った。

庭園で籐製の椅子に座り、あの唄を唄っていたルウィーラは、手元に何かを抱えていた。まるで赤子を抱える様に大事そうに何かを抱え、覗き込み、あの異国語の唄を唄っていた。

「あの丸めた掛布を、ユーリ様と思い込んでおられるのです」

アルデイスの乳母が悲痛な面持ちで告げた。

私が出陣した後、残されたルウィーラは数日の間子を求めて泣き叫び、そしてアルデイスの使っていた子供用の掛布を見つけ出すと、それを抱え込み大人しくなったのだという。

掛布を我が子と信じてあやしているルウィーラの表情は穏やかで、とても気が触れている様には見えなかった。

静かに歩み寄る私達に気付いたルウィーラは、微かに首を傾げた。

「母上、ただいまかえりました」

アルデイスの挨拶の口上に、ルウィーラは更に首を傾げ、不思議そうな表情でアルデイスを見、そして私を見た。

「だあれ？」

やはり．．．、ルウィーラには私の顔どころか、己が息子の顔さえも分からなくなっていた。アルデイスが傷ついた表情を浮かべた。

「ユーリだよ、ルウィーラ姫」

私は困惑を押し隠し、無理に微笑みながら彼女に伝えた。

「ユーリ．．．．．？」

「無事に帰還した」

「ユーリ．．．、何故．．．？ユーリが二人いるの？」

ルウィーラはアルデイスと私の顔を交互に見比べながら、困った様な表情を浮かべた。

「私は、エドキス、ユーリの兄だ。ユーリはこっちだ」

そう言って戸惑うアルデイスの背を押してやると、彼はゆっくりと母親に歩み寄り、彼女の首に両手を伸ばしてその肩に顔を埋めた。ルウィーラは抱えていた掛布を放り投げると、幸せそうな表情を浮かべて素直にアルデイスを抱き締めた。

「ユーリ、わたくしのユーリ」

アルデイスは涙を零していた。

「ユーリ？泣いているの？ユーリ？」

ルウィーラが、俄に顔色を変えた。

「あの男に、あの男に酷い事をされたのね？何をされたのです？ユーリ」

ルウィーラはアルデイスの両腕を掴むと、鬼気迫る表情で問い質した。

「あの男、許さない、呪ってやる、わたくしのユーリに、わたくしのユーリに」

母親の、狂気の宿った瞳を目の前にし、アルデイスは何を思っただろう……。

私はルウィーラを宥め、だましだまし、母親の剣幕に硬直していたアルデイスから引きはがした。衝撃が大き過ぎたのか、アルデイスの涙も止まっていた。

もうその頃には、ルウィーラの寝室の扉の外には錠前が取り付けられていた。彼女は以前に一度、寝ずの番の目を盗み真夜中にふらりと庭園に出てしまい、ちょっとした騒ぎを起こした事があったのだ。それからルウィーラのは就寝後は、扉錠を下ろす様になった。

アルデイスの教育係は、正気を失ったルウィーラのもとに暮らすのは、アルデイスにとって精神上良く無いという旨を父に進言していた。父は、本城にアルデイスの居室を与えたが、アルデイスは移らなかった。

ルウィーラの狂気は、アルデイスから笑顔を奪い、無邪気さを奪い、表情までをも奪った。あの呪詛の言葉を、彼は幾度母親の口から聞かされたのだろう。ルウィーラは、帝家の人間であるアルデイスの前で一体幾度、帝家の人間を呪ったのだろう。帝家の血を引く彼の前で、幾度その血を蔑み呪ったのだろう……。アルデイスはその後、決して泣く事はしなかった。少しでも自分が涙を見せると、母の狂気が顕著になると言う事を理解していたのだろう。

その後、彼女は病を得、アルデイスの十歳の生誕日を待たずして亡き人となった。臨終の折、彼女は正気を取り戻し私の名を思い出した。私を見て、私の名を細い声で呼んだ。

「この子を、お願い、貴方にしか頼めないのです……、エドキス皇子……」

やつれ果ててはいたが、ルウィーラは未だ儚く美しかった。私は、生涯アルデイスを守ると、この時、もう一度ルウィーラに誓ってやった。今度はきちんと剣に誓ってやったのだ。ルウィーラは、ほっとした様に微笑み、忝く……と呟き、息を引き取った。アルデイスは、泣かなかった。只、母親の手を握り、息をしなくなった少女のような顔を、硝子玉の様な瞳で見詰めていただけだった。

ルウィーラの葬儀はひっそりとささやかに行われた。後ろ盾も持たぬ側室であつた為、一年の服喪を強制される事も無かった。その為、彼女の為に一年の間喪に服したのは、アルデイスと私だけであつただろう。生前の彼女に仕えた者達でさえ、一年の服喪を行った物は無かつたであろう。生前、帝国を呪詛する言葉を散々喚き散らした彼女の為に、そこまでしてやる者がいたとは考え辛かった。

ルウィーラが身罷つた後、私はアルデイスを本城の私の私室に連れて来た。どちらにしろルウィーラが身罷つた以上は、アルデイスもあの離れの館を出なければならなかつた。彼が以前本城内に与えられた部屋は、私の部屋からは距離があり、又、私の部屋部屋に比べると、程遠い造りと広さであつた。それ故、私は自室の内の一部屋にアルデイスを住ませる事にしたのだ。案の定、又、母が反対した。

「売女の息子を住ませるのか？」

私は、母が激怒しながら言つた言葉の意味が理解出来る程に成長していた。

「ルウィーラ姫が売女なら、貴女は一体何なんですか？皇后陛下」

私は、ルウィーラを侮辱する母を憎んだ。彼女を母と呼ばなくなつて、どれ程になつていたのである。私は父を嫌い、母を憎み、同母の兄には何の情も持つてはいなかった。他の異腹の兄姉達に対しても同様であつた。私にとっては皆、血の繋がらぬ他人以上に他人であつた。唯一、アルデイス以外は……。

母は、私の言葉に身体を震わせた。

「彼女が売女なら、貴女だつて売女だ」

その瞬間、私は頬を張られていた。笑いが込み上げた。この女にこんな言葉を面と向かつて言つたのは、後にも先にも恐らく私だけだろう。

「お怒りですか？なら私に毒を盛ればいい、末姫の母親に毒を盛つた様に」

「何と言う事を、何と言う事をつ、そなた、この母を愚弄するか」
四つになる末姫の母親は帝国貴族の娘であり、父の寵愛を一身に受けた姫であつたが、二人めの子を身籠つた時に原因不明の死を遂げた。末姫がまだ二歳にも満たない頃であつた。死因は公にはされなかつたが、毒害であつた事を私は知っている。恪氣の為に、母が毒害させたのであろう。今まで母が毒害させた人数は、恐らく両の手指では足りない程だろう。

寵姫を殺された父は、誰の差し金かを知っていた筈である。だが、証拠を掴めなかつたのだらう。仮令証拠を掴んでいたとしても、皇后に立てられた母を処罰するのは難しかったであらう。彼女には強力な後ろ盾が付いていた。それ故に皇后に立てられたわけである。

私がアルデイスを引き取る事に関して、父は別段異を唱えはしなかつた。私には、ブラコフ・ダウゼント候が後見として付いていたが、アルデイスはまだ後見人を持っていなかつた。その旨を父に進言すると、父はブラコフに、私共々アルデイスの後見をも務める様命じた。

恪氣の感の強い母にとつてはさぞかし面白く無かつた事であろう。父が他の女との間に成した子を、己の実の子が手元に引き取るなどという事は……………。

案の定、間もなくしてアルデイスの食事に毒が盛られた。普段は二人で食事を摂っていたのだが、たまたま私が留守をしたある日の事だった。私達にも、それなりに毒味役は付いていたが、その他に私は毒味用として小型犬を何匹か飼っていた。侍女がそれらの犬達にアルデイスの食事を毒味させようとしたら、どの犬も匂いを嗅いだきり、口にしようとはしなかった。毒に関して良く仕付けられた犬達であり、余程の毒でない限りは、敏感に嗅ぎ分ける。

私の留守を狙つて毒が盛られたのだ。誰の差し金かなど、私にとつては考えるまでもなかった。命を奪つたとて、政治的に何の得にもならない、外腹の五番めの皇子に毒を盛るなど……………。

その時から随分と長い事、一家での晩餐の際、又、公の席の際にアルデイスが口に入れる物は、私が総て毒味をして見せた。そう、母に見せつける為であった。二人の男子しか持たない母に取つて、私を死なせるわけにはいかなかったであろう。さもなくば、兄である皇太子に何か事があつた場合、皇帝位はやがて他の女の産んだ皇子に取られ、母の権力も失墜するであろうから……………。

「アルデイスを害して、得をする者がいるとは思えぬが……………」
確か、兄達の誰かが言つた。

「得はしなくても、喜ぶ人間がいるようです」
私は答えた。

「本当に毒が入っていたら……………、エドキスが死ぬぞ……………」

その時傍らのアルデイスがぼつりと呟いた。
「構うものか」

その時、私は本当にそう思つた。十五にしてすでに私は生に対し、それ程強い執着を持つてはいなかったのだ。それ以上に私は、アルデイスを失う事を怖れた。何故だろう……………。ルウィーラに誓つたからか……………。私はあの誓いに縛られていたのであるうか……………。

．．．。今でも縛られているのであろうか．．．．．。ならば、
もしもあの様な事を彼女に誓っていなかったなら私は、父や、他の
兄弟同様、彼の事を捨て置いていたであらうか．．．．．。否、
誓いなど、只の口実に過ぎないのだらう．．．．．。ルウィーラの忘
れ形見を捨て置く事など、どうして出来よう．．．．．。私は、ル
ウィーラを愛していたのだ。それが、母に対する様な愛情だったの
か、女に対する愛情であつたのかは分からない。只、私は彼女の面
影に捕われた。彼女の死後、時が経つにつれ彼女の面影は鮮烈にな
つて行くばかりであつた。様々な女達に手を出しても、実際に彼女
達自身を見ていた事など無かつた。その証拠に、これまで係わつた
女達の顔を上手く脳裏に描く事が出来ない。私がそこに重ね見てい
たのは、いつでもルウィーラであつたのだ。そう．．．、いつ
だつて．．．．．。

2・帝国の皇子達（1）

クルトニア．．．．、この大陸の中原を占める帝国の名であり、永きに渡る歴史を所有する国、そして永らく軍事国家として、その名が知れ渡って来た国であった。

現皇帝スルターク五世は、歴代皇帝に劣らぬ程の好戦的人物であった。そして当然の如くその気質は大陸中に知れ渡っており、その子供達の悪評もまた、大陸中に轟いていた。

好事家でもあった皇帝スルタークは、正妻の目を盗み、多くの女達に手を付け子を成したと言われているが、正式に認められていた子等の中で生存していたのは、当時八名のみであった。その内男子は五名、正室腹の者が皇太子を含む二名の、側室腹の者が三名であった。

側室腹である五番目の皇子は、その年十七になった。

母は、その昔帝国に攻め滅ぼされたシルキア王国の王女であった。まだ十六の時に、手籠め同然に皇帝の子を孕まされ、十七でこの皇子を産み落とした。そして発狂し、皇子が十の生誕日を迎える前に鬱くなった。

皇子の名は、アルデイス・ユーリディン、滅多に笑顔を見せぬ影のある皇子であった。剣の腕は中々のものであり、それに関しては周りから一目置かれる存在ではあったものの、全く持って無愛想なその気質から、大層な変わり者扱いをされていた。

帝城内に儲けられた軍兵達の練武場には、今日も剣の打ち合う音が高々と響いている。気付けば人だかりが出来ているが、別段珍しい光景というわけでは無かった。その兵達の輪の中心にいたのは、団栗色の髪、まだその顔立ちにあどけなさをそこはかと残す青年であつた。練武用の、先の潰された剣を華麗な身熟^{みじな}しで振るう。対戦していた相手があつという間に剣をはね飛ばされると、すかさず輪の中から別の者が名乗りを上げ、青年に躍りかかつて来た。その度に取り巻く輪からは、やんやの声が激しく上がる。そんな男達のむさ苦しい喧噪へと、静かに近付いて来る者があつた。

その人物に逸速く気付いた兵達は、姿勢を正すや彼の為に道を空ける。自然と出来上がった道を、あたかも当然の如き表情で通り抜けると、彼はその青年の剣技を腕を組みながらしばし眺めた。顔立ちを見てみれば、輪の中心で剣を振るう青年に似ていなくも無い。青年の団栗色の髪よりもほんの心持ち濃い色の髪は、青年同様短く刈られており、並んで立てば恐らくは、その細身の体型も良く似ていた事が分かつたであろう。だがその瞳だけは大きく異なっていた。その彼の、色素の薄い瞳の色……、剣を振るう青年の瞳に比べると暖かみの全く無い寒々しい、ごく薄い茶とも黄とも言える色をしていた。

青年の相手をしていた兵が打ち負かされた時、端で見物していた彼は、突然地を蹴り腰の剣を引き抜いて、後ろから剣を振りかぶり青年に襲いかかった。周りの輪から鋭いどよめきの声が起こった。見物人の誰もが、手に汗を握った。しかし……………。

間一髪で半身を翻した青年の剣が、襲撃者の剣を受け止めていた。襲撃者が、ふつと鼻で笑った。

「良く受けた。アルデイス」

「汚いぞ、エドキスつ。しかも真剣で……………」

「敵が、そんな事を頓着すると思うのか？坊や」

皮肉な笑みを浮かべながら、エドキスはアルデイスの剣を弾くや問答無用で襲いかかる。打ち合う事数合、周りが息を飲んで兄弟の剣技を見守った。

数刻の後、剣を空高く弾き飛ばされたのは、歳若い青年の方であった。

「お前の負けだ。罰として今晚は私に付き合え、いいな」

それだけ言い捨てると、エドキスは悔し気な表情を隠しもしない弟にさつさと背を向けた。

エドキス・アルゼイス、帝国の第四皇子であった。正室腹の皇子であり、皇太子に次ぐ帝位継承権を持つ皇子であった。八人の帝家の子息子女達の中では、一番の切れ者だと影では噂されていたが、大変な皮肉屋として知られていた。そして又八人の皇子皇女達の中では、一番酷薄な人物としても悪評高かった。彼の同腹の兄である皇太子は、幸いな事に情の深い面も持ち合わせていたが、この皇子にそんな面を認める者は、殆どいなかったと言って差し支え無かつたであろう。実際の処、実の両親に対してさえ、彼は情などという物は持っていないかったのである。

「殿下、デザウ候主催の舞踏会にお出ましになられるのですか？」

「ああ、かまわないだろう？アルデイスも連れて行く」

「構いませぬが、アルデイス様が首を縦に振りますでしょうか．

」

「今宵は嫌とは言わせないさ」

口元を歪め笑みを浮かべるエドキスに、彼の第一の側近であるブラコフ・ダウゼント候は密かに溜息を吐く。

「又、アルデイス様の御機嫌を損ねる様な意地悪をなさったのですか？殿下」

その言葉に、エドキスは声をたて短く笑った。

「可愛いから、つい苛めたくなるのは確かだが．．．、今回は違うぞ」

「如何でしょうね．．．」

すでに髪には白い物もかなり混じる年齢のブラコフ候は、大柄であるせいかどうか、年よりも若々しい。二人の皇子達を、幼い頃より見守り補佐して来た人物であった。この世の中で、二人の皇子達の人となりを一番良く理解していたのは他でもない、このブラコフ候であつただろう。

「それでは、デザウ候の方へは急いで使いを出して、その旨伝えておきましょう」

「ああ、アルデイス共々、楽しみにしているとでも伝えておけ」
そう言つて、エドキスは楽しそうに笑った。

ブラコフ候の予想通り、着飾つた第五皇子は不機嫌を隠そうともしせずに馬車に乗り込んだ。

「汚いぞ、エドキス．．．」

「何が汚いだ、お前が負けたのが悪い、恨むなら己の剣の未熟さを恨め」

皇族らしく、華やかな衣装に身を包んだ二人の皇子達は、馬車の端と端に座を占め、二人して長い足を投げ出していた。片や口角を上げながら、片や不機嫌な表情で窓の垂れ幕の隙間から外を眺めながら。

「お前も、十七にもなつて、いつまでも社交的な場を避けるのはよせ、アルデイス。人付き合いが下手なのは分かる。華やかな場が

嫌いなのも分かる。好きになれとは言わないが、少しは慣れる。ついでに女の扱い方もな」

「何の為にだよ」

「そんな事、人に聞かなきゃ分からないのか？だからお前は“坊や”だっというんだ」

エドキスは、呆れ顔でこれ見よがしな溜息を吐いた。

「理由は幾つかある。ああいった処に顔を出しておくと、時たま思わぬ貴重な情報が手に入る事がある。又、各貴族達の動向を探るのにも良いし、ひよんな事で弱みを掴めば、それが又、役立つ事もある。あとは……、まあ女だな、嫌でも色々寄って来る。皆、言い含められてる女ばかりだから、こっちが望めば簡単に足を開く。大貴族の娘から、あわよくば帝家の側室にでも入れればって程度の家柄の娘まで、様々だ」

エドキスは、忌々し気に息を吐く。

「だが、そういった女達も時として役立つ。まあ、お前に寄って来るのは、恐らく純粹にお前に興味を持っていてる女だろうから、安心しろ。気に入ったのがいたら抱いてやれ、きつと喜ぶだろうよ。子の一人や二人、孕ませたってお前なら政治的にも問題無い」

「俺は、お前のそういう処が嫌いだ」

ぽつりと呟くアルデイスに、エドキスは心底可笑しそうに笑い出した。

「“そういう処”だけじゃないだろう？お前が嫌いなのは、アルデイス坊や」

「手当たり次第、女に手を付けて回る処も嫌いだ」

「馬鹿を言え、きちんと選んで手を付けてる」

「手を付けては、すぐに捨てる。大抵一度で捨てるだろ？」

「当たり前だ、それなりの価値のある女ならまだしも、貴族等の思惑がらみの女なんぞ、後々厄介なだけだろう」

皮肉気な笑みを浮かべるエドキスに、アルデイスは口を噤む。

「まあ、深く考えるな。要は、お前は女の扱い方をさっさと覚え

ろって事だ。帝家の男子が公の場で、女の相手も満足にこなせない
様じゃ問題だぞ」

苛立たしく思いながらも、アルデイスとてエドキスの言い分が正しい
事くらい分かっていた。

二人の皇子達が、ブラコフ候を伴い現れると、広間の誰もが深々と
頭を垂れ最高の礼を皇子達に対し取った。長身で細身で、その上
中々の美男子であった皇子達は、評判はどうであれ、若い娘達には
それなりの人気はあった。エドキスは、ことあるごとにアルデイス
に愛想良くしろだの、笑えだのと耳打ちして来た。それが鬱陶しく
て、アルデイスは隙をみて、さっさとエドキスから逃れると、杯を
片手に人気のないバルコニーへと出た。冷えた空気が、酒で火照つ
た頬には気持ち良かった。

アルデイスには、全く持って楽しい時では無かった。貴族等と上
辺だけの会話を交わす事も、上流の女達の手を取り機嫌を伺ってや
る事も、白々しく、又馬鹿馬鹿しいとしか感じられなかった。まし
てや舞踏などとても無い。エドキスの言う事は分かるのだが、や
はり自分には苦痛以外の何ものでもないのだ。

石造りの手摺に両肘を付いて、前屈みに寄りかかりながら独り静
かに杯を傾けていると、後ろから密やかな衣擦れの音が近付いて来
た。アルデイスは密やかに溜息を吐く。もう邪魔者がやって来てし
まったのかと……。頼むから自分の事は放っておいて欲しい。
。そんな内心の言葉など、口に出さぬ限り相手に伝わる筈など無
い。

「春とはいえ、夜は冷えます、殿下。あまり長くおられると、お
風邪を召されますわ」

涼やかな若い娘の声であった。

「……………いらぬ世話だ。お前の方こそ、中へ引っ込んだ方がいいんじゃないのか？風邪を引くぞ」

アルデイスは、振り返りもせずに答えた。

「こちらを向いても下さらないのですか？アルデイス殿下。女性をそのように邪険になさるのもどうかと思いますわ、帝国騎士道に反するではありませんか？」

きっぱりとした物言いは、しかし機嫌を損ねている様には聞こえなかった。

アルデイスは、軽く息を吐くと、振り返って声の主を見た。

「別に邪険にしたわけでは無いんだが……………、ただ興味が無かっただけ」

無愛想なアルデイスのその礼を失った言葉に、だがしかし娘はにこりと微笑んだ。

「では、これから興味を持って下さいませ、殿下」

アルデイスは訝し気な目を、その娘に向けた。年の頃は恐らくアルデイスとそうは変わるまい。春らしい柔らかな色彩の衣装に身を包み、褐色の柔らかそうな髪を若々しく結い上げている。どこの娘かは分からなかったが、その豪華な装いから、かなりの家柄の娘だという事だけは、いかなアルデイスとて想像に難くなかった。

「何の用だ？」

アルデイスは、娘の言葉を無視して尋ねた。

「用が無くては、お声をかけてはいけませんでしたか？」

「……………別に、いけなくは無いが」

その返答に、娘は実に嬉しそうな表情を見せた。

「わたくし、殿下とお話したいのです」

「何の話がしたいんだ？俺と話したところで、楽しい事なんか無いと思うぜ」

「それは如何でしょう。楽しい事があるやもしれませんわ」

娘は朗らかに言いながら、大胆にもアルデイスの腕に自分の腕を絡めて来た。

「俺を誘ってるのか？」

アルデイスのぞんざいな物言いにも、娘は動じるどころか挑発的な眼差しを返して来た。

「そうですね、貴方様を誘ってますの」

つんと顎を聳やかせる娘に、アルデイスは苦笑した。

「帝国貴族の娘の貞操観念のは、一体どうなってるんだ？別に親に言い含められてるわけでもあるまい？俺に取り入ったって、何の得にもならないだろうに」

「わたくしは、ただ純粹に殿下に一夜のお情けを頂きたいだけですわ。親など関係ございません」

今まで、これ程あからさまに誘惑して来た女は他にいなかった。勝ち気な瞳を真つすぐに向けて来る様は、そんな言葉を口にしたのぼせながらも、一種清らかにさえ見えた。だからなのだろう、アルデイスは、無言で娘の手首を掴むとバルコニーを後にしていた。

2・帝国の皇子達(2)

娘の手首を荒々しく引きながら、アルデイスは空き部屋を見付けると、素早くその娘を引きずり込んで鍵をかけた。そして天蓋付きの寝台に娘を押し倒し、そのままその上に押し掛かった。誰の為なのか、一時の情事を楽しむ客人達の為なのか、室内には幾つかの灯りが灯っていた。その灯りに照らされた娘の顔に一抹の恐れの色が刷かれる。アルデイスは無言のまま彼女の美しく結われていた髪を掴むと、いきなりその唇を塞いだ。幾度か軽く重ねると、抵抗も何も無く娘の唇はすぐに緩んだ。その隙間を割り彼女の舌を捕らえ、貪る様に深くその口内を味わっていると、やがて娘の喉からは苦しいような声が洩れた。アルデイスは目を開いたまま、娘の苦しい気に睨られた臉を見ていた。激しくなる口付けに長い睫毛は揺れ、その喉からは益々苦しい細い声が洩れ出す。彼女の息があがるまで、アルデイスはその唇を解放してやろうとはしなかった。

それまでも愛してなどいない女を既に幾人も抱いた経験はあった。女に惚れた事など、まだ一度も無かった。女を愛しいと思った事も、女に何かしらの夢を抱いた事も無い。だからといって女を憎んだ事も無ければ、エドキスの様に女を物として見た事も、その様に接した事も無かった。だがこの時ばかりは、何故かこの娘を甚振いたぶってやりたい気分させられたのだ。あの様にあからさまに誘いをかけて来た娘を、一瞬でも清らかだと感じてしまった己の気持ちへの嫌悪感からであったのか、アルデイス自身分からなかった。

アルデイスは娘から身を起こすと、冷めた瞳で乱れた息の娘を見下ろした。

「それ以上の事がしたいなら、自分で脱げ」

上気した頬に瞳を潤ませた娘は、のろりと起き上がると、衣装を脱ぎ始めた。燭台に照らし出される彼女のその様を眺めながらアルデイスは、何て沢山の布を身に着けているのだろと、ぼんやりと思った。娘は恐らく、一人で衣装を脱いだ事など無かったのである。随分と苦労している様であったが、時間をかけながらも全裸となり、結い上げていた髪飾りの最後の一つまでも寝台の下に落とした。そして今度は、我が身を隠しもせずに両手を伸ばすと、アルデイスの上着の首もとから飾り釦を、ひとつひとつゆっくりと外し始めた。

アルデイスは娘の望む様にさせながら、片手で彼女の頬に触れ、今しがた彼女の息が上がるまで翳ってやった唇に触れた。彼女に上着を脱がされ、その下のシャツを脱がされたところで、娘の細い首筋に顔を埋めた。滑らかな首筋は、酷く甘い香りがした。春の花々に群がる蜂というのは、こんな気分なのかもしれないと頭の何処かで思った。そして唇を這わせ、時折きつく吸ってやった。

娘は両腕をアルデイスの背に回し、されるがままに時折震える息を零した。アルデイスの手が胸の膨らみを包み込み、唇がその頂を含んだ時、彼女の口からは細い声が洩れた。そして彼の手が閉じられていた足を割り、その間の奥底に滑り込んだ時、娘は身体を堅くした。手の甲で口を押さえながら、アルデイスから苦しい顔色を逸らした。誘いをかけて来た時の強い瞳とは裏腹な姿であった。そう、まるで生娘のような……。アルデイス自身とそう年が変わると思えぬ、うら若い娘である。然程の経験があるとは彼も思っていないが、自ら服を脱ぐ様な女である、よもや生娘だなど予想だになかった。

潤った彼女の中にアルデイスが一気に押し入った時、娘の口からは鋭い叫びが上がった。アルデイスにしがみつくと娘の両腕もその身

も震え、背けた顔は苦痛に歪み、瞳からは涙が零れていた。その叫びと震え．．．、それが喜びの為では無かった事くらい、若いアルデイスにとて分らない筈が無かった。

「初めて．．．だったのか？」

アルデイスが我に返り尋ねると、娘は小さく頷いた。彼女は身体を重ねたまま動かぬアルデイスを見上げ、痛々しく微笑んだ。

「わたくし、近々輿入れ致しますの」

「．．．．．」

「だから．．．」

アルデイスには、さっぱり理解が出来なかった。輿入れするから、だから何だと言うのだ．．．．．。

「だから、意に染まぬ方の物にされる前に、殿下のお情けを頂きたかったのです．．．」

消え入る様な囁きであった。

「．．．．．ずっと、ずっと、お慕いしておりました。わたくしは、今、とても幸せです、殿下」

衝撃であった。

「この夜の思い出を胸に、わたくしは恐らく強く生きて行けると思います」

涙を零しながら見上げて来る娘を、その時初めて美しいと感じた。アルデイスは、彼女の頬に口付けを落とし涙を吸い取った。そしてその唇を塞ぎ、先程とは打って変わった優しい仕草で、幾度も彼女の唇を味わった。その褐色の髪を幾度も撫でてやりながら、背を幾度も優しく撫でてやりながら、幾度も口付けの雨を降らせてやりながら、娘を抱いてやった。

彼女は泣きながら、もう一度幸せだと呟いた。

名前さえも聞かなかった。その娘がどこへ嫁ぐのかも知らない。調べれば以外と簡単に分かるのであろうが、アルデイスはこれっぽ

ちも知りたいとは思わなかった。

恋する者がありながら、意に染まぬ者との婚儀を強いられる、皇族や貴族なら当たり前の事だ。それならば初めから、恋などしなければいい。あの娘は何故この自分になど恋したのであるうかと、アルデイスは娘を哀れんだ。そして、輿入れの前に自分に抱かれたあの娘は、本当に幸せだったのだろうか．．．と、アルデイスはその後も考えた。

帰りの馬車の中で、ぼんやりと窓の外を眺め、あの娘の事を考えていたら、いきなり顎を掴まれ強引に唇を奪われた。途端に思考は現実に戻り、相手を乱暴に押しのけ、唇を拭った。

「そういう事はするなつて言ってるだろうっ！気色悪いっ！」

「さつきから呼んでるのに、上の空だったお前が悪い」

本気で怒る弟に、そう言つて悪びれもせずになやりと意地悪く笑うエドキス。

「お前は両刀遣いかよっ！？」

「両刀遣いの何が悪い？お前ならいつでも喜んで抱いてやるぞ」
流し目を向けながら、とんでもない事を言う兄に、アルデイスは殴り掛かった。その拳を難無く受け止めて、エドキスは爆笑し出した。

「馬車の中で暴れるな、全く。冗談に決まってるだろう」

「お前のはいつも冗談に聞こえないんだっ！くそっ、お前のせいで鳥肌が立った」

本気で嫌そうな顔をしているアルデイスの様子に、エドキスは笑い続ける。

「何時まで笑ってるんだよ」

「お前、想像しただろ？」

アルデイスはかっとし、再び拳を繰り出すも、やはりエドキスに

難無く掴まれた。

「暴れるなつて、からかい甲斐のある奴だな。安心しろ、私は男よりも女の方が断然好きだから」

まだくつくつと笑い続けているエドキスの横で、アルデイスはふてくされた様にそっぽを向いた。

「お前、ザヴィアス候の娘に手を出したのか？」

漸く笑いを納めたエドキスが唐突に聞いて来た。

「ザヴィアス候．．．？」

「何処の娘だかも知らずに手を出したのか？」

その問いに、アルデイスはどきりとさせられる。見ていない様でいて、この兄は何時だつてこの自分の動向を把握しているのだ。それが癢でたまらない。まったく飼犬の気分になせられる。アルデイスは、馬車の窓枠に頭を凭せ掛けながら悔し紛れに己の唇を噛んだ。

「近々、嫁ぐと言っていた」

「らしいな」

長い沈黙の後に呟かれた弟の言葉に、兄はごく自然な相槌を打った。

「意に染まぬ男のものにされる前に、俺のものになりたかったんだと．．．．．」

「ほう．．．、それで情けをかけてやったわけか？優しいな、アルデイス坊や。で、あの娘が嫁ぎ先で、お前によく似た子を産み落としたら、又おもしろいのだがな」

「嫌な冗談はよせよ」

「いや、これは冗談じゃない。本気で面白いと思うぞ」

「．．．お前なんか大嫌いだ」

「ああ、知ってる」

エドキスは楽しそうである。

「まあ、あの娘とはこれっきりにしておいた方が無難だな」

「言われなくても、そのつもりだ、大体、会う機会だってそうそう無いだろう」

「さあ、それはどうかな．．．．。お前は彼女の嫁ぎ先を知らないのか？」

「興味無い」

「全く．．．．、お前は本当に帝家の人間か？」

アルデイスは訝し気な表情でエドキスを振り返った。皮肉気な笑みを口辺に浮かべてはいたが、その口調は呆れたと言わんばかりであった。

「第三皇子だよ」

予想だにしなかった兄の返答にアルデイスは口を開きかけたが、言葉など出て来る筈も無い。

「あのザヴィアス候の娘は、第三皇子の正妃として帝家に嫁ぐ予定だ。私達の義姉になる娘だったってわけだ」

「．．．．．」

三番目の兄の婚礼の儀が年内に執り行われる予定であった事は、無論知っていた。帝国貴族の娘を娶るという事も記憶にはあった。だがそれ以上の事は、記憶していなかった。興味も無かったし、第三皇子との交流も殆ど無かったのだ。

「その娘に、お前は兄上よりも先に手を出したってわけだ。はははっ、こんな愉快的な事はそう無いな。それを知ったら、あのボンクラ、何て言うか」

「そうだったのか．．．．」

アルデイスは溜息混じりに呟いた。

「どうだ？優越感を感じるか？それとも罪悪感を感じるか？」

意地の悪い問いかけに、だがアルデイスは真面目に考える。優越感など微塵も感じてはいない。だからといって縁の薄い兄に対して罪悪感を感じているだろうか．．．．？そんな事は分からなかった。ただ、これから嫁ぐ娘が、未来の義理の弟であるこの自分

などに恋をしていた事が愚かしく滑稽で、そして哀れだとしか感じられなかった。

「何も．．．感じない．．．、ただ滑稽だとしか．．．」

「そうか」

再び顔を背けた弟に、エドキスはそれ以上言葉を続ける事はしなかった。

半年余りの後、アルデイスは兄の婚礼の儀式で、豪華な婚礼衣装に包まれたザヴィアス候の娘を目にした。第三皇子はエスニア公の称号を持っており、普段は帝国南部のエスニア州に居を構えている。それ故婚礼の後、兄の妃となった娘は、兄と共にエスニア城へと旅立って行った。その後、義姉となった彼女との間に何かがあつたかといえ、全くもって何も起こりはしなかった。あの日、あれほど大胆にアルデイスを誘った彼女は、兄であるエスニア公に嫁いだ後は、非常に貞淑な妻となつたらしかった。年に幾度か顔を合わせる機会もあつたが、アルデイスは、弟としての兄皇子の妃に対する礼儀を崩す事は無かつたし、彼女も又、義姉としての礼儀を崩す事は無かつた。ただ、アルデイスへと向ける彼女の優しい瞳だけが、もしかしたら、何かを物語っていたのかもしれない。

2・帝国の皇子達(3)

後の歴史家達は口を揃えて唱える。それがクルトニア帝国の転換期であったのだと。長きに渡って強大な力を持ち続けた帝国の終焉は、その時既に垣間見えていたのだと……。

野営の準備の為に、兵達がここかしこで忙し気に動き回っていた。そんな中を青年が一人、ぶらりと歩いていった。青年の姿に気付き即座に姿勢を正す者もあれば、青年が脇をすり抜けるのに全く気付かぬ者もあったが、どちらにしろその青年は気にも止めはしなかった。鎖帷子の上に着込んだチュニツクの、金系銀系の豪華な刺繍が彼の身分を物語っていたにも拘らず、青年は一人の供をも連れずに歩いていた。そんな事は珍しくも無かったのであるう、青年の姿に気付いた兵卒達も、敬礼をするとすぐに又手を仕事へと戻す。

兵達の喧噪の間を擦り抜けると、青年はふと立ち止まり空を仰いだ。木々に切り取られた空は、黄昏の色に染まっている。彼は、適当な木の根元に腰を下ろすと凭れ掛かった。額にかかる団栗色の髪を掻き揚げ、影のある瞳を閉じた。

又一つ、国が滅びた。

皇太子シルキア公ロスシールド率いる帝国軍は、南国フェリスを攻め滅ぼした。恐るべき勢いと言えば確かにそうであったのだろう。帝国はこの終焉へ来て、まるで運命の女神シェリアスに抵抗しよう

とでもするかのように、周辺諸国を蹂躪した。後世、帝国最後の皇帝と呼ばれる事になるスルターク五世の御代、この大陸の地図がどれ程塗り替えられた事であったか……。

「殿下っ！アルデイス殿下っ！」

少女の様な高い声が己の名を叫んでいる事に気付き、彼は瞼を上げた。アルデイスは、木に背を預けたままふと微笑んだ。あの小動物の様な小姓は、あとどれ程でこの自分の姿を見つけ出すであろうか……。アルデイスは返事を返す事も無く、再び瞼を閉じた。やがてばたばたと慌ただしい足音が近付いて来る。

「殿下っ！」

やれやれ、ようやく見出されたかと思いつつ、アルデイスは片目を開けてこちらに駆けて来る瘦せっぽちな小姓を見た。

「もう……。一言仰って下さいっていつもお願いしてますのに……。突然姿を消さないで下さい、殿下」

眉間に皺を寄せて訴える自分付きの小姓の表情に、アルデイスは苦笑する。

「お前は過保護だな、レイク。俺がいない時は、お前も休めば良いだろうに……」

「そんな分けにはいきませんよ、殿下」

「何故だ？」

「だって、殿下のお世話をさせて頂くのが、僕の務めですもの」

「世話が必要な時は、こっちから言うさ。取りあえず、お前も座って休め」

「そうもいかないんです。エドクス殿下が殿下の事を捜しておられましたので」

「そんなの、後でいいさ」

「そうはいきませんよ、殿下っ！僕が叱られるじゃないですかっ！」

レイクの情けない表情に、アルデイスは再び苦笑を漏らす。やれ

やれと呟きつつ、アルデイスは腰を上げた。

レイクを従え歩くアルデイスの耳に、女の叫び声が聞こえた様な気がした。足を止めた主に、少年レイクは不思議そうな顔を向ける。

「殿下？」

「聞こえたか？今の叫び声」

「えっ？」

アルデイスは、足早に歩き出す。

「でっ殿下！？」

レイクは慌てて後を追う。

間もなくアルデイスとレイクは、兵卒達の天幕よりも心持ち大きな天幕の前に立っていた。女の叫びが再び聞こえた。こんな野営の場にあつて、果たしてそれは似つかわしくは無い声であつたのか。、それとも鬼気迫る女の金切り声はその場に似つかわしかったのであるうか……。すでに騒ぎを聞き付け何事かとその天幕の辺りを取り囲んでいた兵達が、アルデイスの姿に気付くと次々に道を空けた。アルデイスが天幕の幕をはぐりレイクを従え中へと踏み込むと、暴れるうら若い女と、それを取り押さえようとしている者達の姿が目映った。

「殿下っ！お助け下さいっ！」

アルデイスに気付いた侍女達が蒼白な顔で泣きついて来た。二人の衛兵に両側から腕を掴まれ叫ぶ女の手は血に塗れており、鋭い何かをきつく握り締めていた。恐らくは鏡の破片であろう、地面に敷かれた敷物の上に割れた手鏡が落ちている。

「好きにさせてやったらどうだ？」

「アッ、アルデイス殿下っ！？」

レイクが狼狽えた声を上げた。暴れていた女の動きが一瞬止まり、虚ろな瞳がアルデイスの姿を捉えた。

「しっ、しかし、王女は自害を」

衛兵の一人が、実直そうな顔を困惑に歪めながら言う。

「させてやればいいだろう、尤もそんなもんじゃ息絶えるまで長かかるだろうがな」

侍女達が息を詰めて見守る中を、アルデイスは王女へと歩み寄った。

彼女の抜ける様な白い肌と濡れた濃紺の瞳、そして何よりその漆黒の髪は異国情緒に溢れていた。帝国に無惨にも攻め滅ばされた南国の王女は、兄である第四皇子が娶る事となっていた。結局、北国メインデルトの王女との婚姻話が上手くまとまらなかった第四皇子も、もう間も無く二十四の年を迎える。第四皇子はこの王女との婚姻と共にフェリス公の称号を与えられる事になるだろう。

「放してやれ」

帝国の末の皇子の命に、王女の腕を捕らえていた衛兵の手が緩んだ。その事に戸惑ったのか、王女は身動きもしない。天幕の隅では、侍女達が蒼白な顔で手を取り合ったまま様子を伺っている。

「どうした？自害したいんじゃないのか？」

感情の削ぎ落とされた皇子の声に、王女がびくりと身体を震わせた。その深く蒼い瞳に憎しみの炎が瞬いた。王女の華奢な身体が突然動いた。血に濡れた手が振り上げられたかと思うと、紅い色が散っていた。侍女達の甲高い悲鳴が再び起こった。

「殿下っ！」

レイクがアルデイスに駆け寄った。衛兵達の腕が再び王女を拘束していた。

「大丈夫だ、レイク」

「でっ、でも」

血に濡れたアルデイスの頬に、レイクは慌てて手巾を取り出して心配そうな面持ちで差し出す。アルデイスは、素直に手巾を受け取ると無造作に頬を拭った。拭われた血の下から紅い線が現れ、そしてそこから又血が流れ出す。

王女の憎しみに占められた瞳は、アルデイスの頬を濡らす血を見

詰めていた。アルデイスが促すと衛兵達は渋々と王女の腕を放し、ほんの数歩だけ下がった。それとは反対にアルデイスは王女に歩み寄ると、後退ろうとするその腕を取った。

「放してっ！汚らわしいっ！」

「なら、その破片を離せ」

フェリス語で叫ぶ王女に、アルデイスも又フェリス語で返した。アルデイスに取りられた細い腕に更に力が籠った。鏡の破片をしつかりと握り締める小さな拳を染め上げている深紅は、その手首をも染め衣装の袖口をも染めている。そしてアルデイスの手をも紅く染めた。

「あまりきつく握り締めると、手指の筋を切断するぜ。そうなれば手が利かなくなるだろう。利き手が物も握れなくなれば、自害するにも支障が出るだろうな」

抑揚の無いその言葉に、王女の手からふと力が抜ける。アルデイスはもう片方の手で、そっと王女の掌を開かせると真っ赤な鏡の破片を取り上げ近くの衛兵に手渡した。

「水桶と薬を持って来い」

「はっ、はい、只今」

侍女の一人が弾かれた様に天幕を駆け出して行った。

アルデイスは手巾で王女の切れた掌を押さえながら、衛兵達も下がらせた。

「手鏡の小さな破片で死ねると、本気で思ったのか？」

アルデイスは、王女の掌を水で洗ってやりながら尋ねた。水桶の中の水は立ち所に真っ赤に染まった。王女は答えなかった。アルデイスは答えを待つでも無く、侍女の差し出す清潔な布で王女の手を拭き取ってやる。

「まあ、急所さえ心得ていれば死ねない事も無いがな……。だが女の腕じゃ時間がかかるだろうよ。事切れる前に発見されて、助けられるのがおちだ」

王女は、俯いたまま悔し気に唇を噛んだ。

「がっかりするな。他にも死ぬ方法なんて探せばある」

王女の口から小さな呻きが洩れた。消毒液が沁みたのであろう。決して優しい手付きでの手当では無い。

「例えば、敷布を切り裂いて縄を縊って首を括るとか、酒を被って己の身に火をつけるとか．．．、二目と見られない屍骸が出来るだろうがな」

「殿下、お止め下さりませ、そんな恐ろしいお話は．．．。王女殿下がそれを実行に移されたら何となさるのです？」

年配の侍女が泣き言を訴えた。

「困るのか？」

「当たり前でございます！王女殿下は、エドキス殿下のお妃となられるお方でございますよ」

「王女にとつちや、さぞ屈辱だろう。殺してやった方がよっぽど親切つてもんだと思うがな」

俯いていた王女が吃驚した様に目を見開いてアルデイスを見た。

アルデイスは血の滲む王女の掌の幾つもの傷に薬をすり込むと、器用に包帯を巻き始めた。

「殿下．．．、陛下のお決めになられた事にございます」

侍女の心配そうな低い声に、アルデイスの手が一瞬だけ止まる。

「分かっている。フェリスを穩便に支配するには、王女の身柄が必要だ。そんな事は分かっている」

王女の手を包帯を巻き終えると、アルデイスは徐に立ち上がった。その瞳は王女へと向けられている。

「だが、替えの王女なら他にもいる。お前が死ねば、僧院に送られる筈の妹姫が代わりを務める事になるだろう」

そう言い残すとアルデイスは去った。残された王女は、やがて肩を震わせ嗚咽を漏らし始めた。

「フェリスの王女が騒ぎを起こしたそうだな」

「ああ」

簡素な夕食を取りながら、エドキスが思い出したかの様にアルデイスに尋ねた。

「それは、そのせいかな？」

エドキスの色素の薄い瞳が、アルデイスの頬の絆創膏を捉えていた。

「ああ」

「許せんな」

「大した傷じゃない、レイクが大袈裟にただけだ」

エドキスは忌々し気に溜息を吐くと、銀杯を傾けた。

「亡国の王女など父上が娶れば良い物を．．．何故、私なんだ」

．．．

「そんなの、良い年をしてまだ独身だからに決まってるだろう」

「くそっ！その辺の帝国貴族の娘あたりで手を打ってくれば良い物を．．．」

「正室腹の皇子じゃ、そうもいかないんだろ、諦めろよ」

「可愛く無いな、お前．．．。人事だと思つて．．．」

エドキスは、不機嫌にアルデイスを睨む。

「可愛い年頃でも無いさ」

もくもくと食事を続ける末の皇子も十九になり、その顔立ちからは幼さも大分消えた。エドキスが、小さな溜息を洩らすのが分かった。

「お前が女だったらな．．．」

ぽつりと呟かれた言葉に、アルデイスは食事の手を止め怪訝な顔を上げた。

「．．．．．何故だ？」

「お前が女だったら、かこいめ困い女にでもしたのにな」

「なっ！？」

アルデイスは気色ばんだ。

「誰にも見せずに大切に囲って、政略なんぞに使われない様、早々に子の一人でも産ませてな」

「気色悪い事言っなっ！怒るぞっ！」

「もう怒っているだろうが？坊や」

エドキスが口を歪めて意地悪く笑う。

「大体、俺が女だったとしたって、お前とは血が繋がってるだろうが！？近親相姦だぞ」

「この帝家にあつて、そんな罪は取るに足らないだろう？過去を見る。親殺し子殺し、兄弟殺し、伴侶殺し、どれだけの大罪が重ねられて来たと思ってるんだ？」

皮肉気に笑うエドキスに、アルデイスは珍しくも思い切り顔を顰めた。

「だからって気色悪い事言っな、くそっ」

「お前が女だったら、さぞかしルウィーラ姫に似て愛らしかっただろうにと思っただけだ」

結局はそこなのかと、アルデイスは無言で息を吐く。

エドキスが亡国の王女を娶る事を極端に厭う理由を、アルデイスは知っていた。それが己の母のせいである事をアルデイスは知っていたが、何も言えなかった。言ったところで、どうにもならないのだ。

『お前も私も、所詮は帝国の駒でしか無い』

アルデイスは、エドキスが以前言っていた言葉を思い出す。確かにその通りだと強く思う。意に染まない女を娶れと言われれば、娶るしかない。仮令、皇太子に次ぐ帝位継承権を持つエドキスであるうとも、それは変わらないのだ。

夕食を終えた頃、ブラコフ・ダウゼント候が姿を見せ、エドキスに何やら耳打ちをした。

「妹姫が？」

興味も無さそうに尋ねるエドキスに、候は頷いた。

帝都へと護送中のフェリスの王女達、その歳若い妹姫がその晩高熱の為に倒れ、そしてほんの数日後に呆気無く息を引き取った。元々身体の弱い姫であつたらしく、あまりにも呆気無く息を引き取ってしまったのだ。その旨は姉姫の耳に入れられたが、彼女は只呆然自失し、がっくりと項垂れたまま侍女達に抱え上げられるまで身動き一つしなかった。

亡国の王女が再び自害を図ったのは、妹姫の死の翌晩の事であつた。

2・帝国の皇子達（4）

アルデイスは王女为天幕の中にいた。寝台に横たわる王女の首の白い包帯が目を射る。昨晚王女は、敷布を裂いて首を括ろうとしたという。

「呆気無く失敗したな」

王女は無表情なアルデイスの顔へと虚ろな瞳を向けた。敷布で縄を縊ろうとも、こんな天幕の中で首など括れる筈も無いのだ。それでも王女はそれを実行に移し、夜更け到天幕を半壊させたのだ。王女は、その日の内に寝台の中で舌を噛み切った。

「又か？昨日の今日ではないか」

エドキスは、眉間に深々と皺を寄せた。

「発見が早かったのですすぐに止血致しましたが、恐らく満足に口をきく事は最早……」

「だろうな」

第四皇子の冷たい反応に、側近のブラコフは口を噤む。

「明日は予定通り出発する。妹姫の一件といい、あの姫の騒ぎといいで帰還が遅れている。これ以上遅らせるわけにもいかん」
「御意」

ブラコフが辞すると、エドキスは銀杯に葡萄酒を注ぎゆつくりと傾けた。アルデイスは先程から、いるのかいないのか分からぬ態でエドキスの寝台に寝そべったまま黙りこくっていた。

「舌を噛み切って死ねるとでも思っていたのか、愚かな姫だ」

「あの監視の中じゃ、自害を試みる端っから見付かるだろうに．

．．．それこそ真夜中にでも舌のかわりに己の手首でも噛み切ってれば成功したかもしれないのにな．．．」

「縁起でも無い事を言うな。死なれたら實際厄介だ」

「戦利の姫を娶るのは、嫌なんじゃなかったのか？」

「ああ、虫酸が走る程嫌さ。だが政なら致し方無かるう？」

「．．．．．」

戦で滅ぼした国の血筋を娶る事は、その時代ごく普通に行われた事であった。そうしてその亡国の正統な支配権を主張し、亡国の民の感情を何とか和らげようとしたのだ。だが、戦利の証とされる姫君達にとっては血を吐く程に辛い事であろう。一族を死に至らしめた男のものにされ、子を産む事を強要されるのだ。アルデイスの中で、女の狂気を帯びた呪詛の声が甦った。この自分を産み落とした女の気の触れた声が、帝家の血を引く息子に向かって帝家の血を呪う。そんな母を哀れみこそすれ、怨んだ事など一度も無い。あまりに弱過ぎた母は、いとも簡単に己の世界へと逃げ込んだ。

王女の為に馬車の中には俄造りの寝台が設えられた。王女は移動の間中その寝台に横たえられ、野営の天幕が張られると衛兵に抱え上げられて天幕の寝台へと移された。

アルデイスの足は、何となく王女为天幕へと向かっていた。王女は目覚めているというので中へ入ってみると、寝台の傍らにいた侍女が彼に頭を下げ、王女が薬湯を飲まないと言って困惑顔で訴えてきた。

「何故飲まないんだ？飲まなければ死ねるとでも思ってるのか？」
横たわる王女は、アルデイスを見ようともしなかった。

「噛み切った舌の痛みが長引くだけだろうに……。死に結びつく程のもんじゃ無いと思うがな。そもそも、舌を噛み切った位で死ねるとでも思ったのか？」

王女がぴくりと反応し、僅かに顔と瞳だけを動かしてアルデイスを見た。恐らく死ねると思ったのだろう。

「浅はかだったな。舌を噛み切った位じゃ人間は死ねない。只、満足に喋れなくなるだけだ」

王女の唇が震え、悔し気な瞳からは涙が溢れた。アルデイスは寝台に歩み寄り腰を下ろすと、王女を抱き起こした。彼女は嗚咽を苦し気に堪えながら、弱々しく抗った。

「取りあえず、薬湯を飲んだらどうだ。拒むなら口移しで無理矢理飲ませるぞ」

言いながら寝台脇のテーブルから薬湯の碗を取って王女の前に翳すと、王女は泣きながらその碗を取って口を付けた。ほんの二口程飲み下すと、王女は嗚咽を堪えきれなくなったのか、寝台に突っ伏した。アルデイスは碗を傍らの侍女に手渡すと、王女の震える肩に掛布を掛けてやった。

その翌日、アルデイスは一行と共に森の中で馬をゆるく駆けさせていた。すぐ傍らにはレイクが馬を走らせている。エドキスとブラコフは、ずっと前の方にその背が見て取れる。木々の間を縫って陽が差し込んでいるその処どころに、鮮やかな蒼い花が咲いていた。アルデイスは先程から横目にその花々を眺めながら馬を駆けさせていた。恐ろしく鮮やかな、目を引く色であった。その毒々しい色はアルデイスの目前に、フェリスの王女の身も心も憔悴し切った顔を

散らつかせる。あの花を人知れず贈ってやったら、あの王女は喜ぶのだろうか……。いや、恐ろしい苦痛を伴う死を怨まぬ筈が無いだろう……。

昼餉の休憩の為に馬車が止められた。

「さあ姫様、少しお外の空気をお吸いなされませ」

侍女の一人がそつと声をかけると、沢山のクッションに身体を預けていた王女は、微かに頷き半身を起こそうとした。侍女達はささず手を貸し、王女を抱き上げる様にして馬車から助け下ろすと、すでに表に用意されていた敷布のクッションの上に王女をそつと座らせた。無骨な軍兵達の目からこの異国の王女を隠す様に、辺りには申し訳程度の布が張られていた。

王女は、無言のままその身に許された景色を眺めていた。紺碧の瞳の辿るのは、鮮やかな蒼色の嶺やかに揺れる美しい花であった。間もなくして舌の半分を失った王女の為に調理されたスープが運ばれて来た。すでに冷たく冷まされている。舌の傷の完全に癒えない王女には、固形物も、ましてや熱いスープも拷問でしか無かったであろう。王女は、殆ど味のない冷めたスープを年配の侍女に促されるままに、素直に口にした。舌を無くした為に、時折口の端から零しながら……。

「ようお召し上がりになりました、姫様。上出来ですよ。何ぞ甘い物でもお持ち致しましょうか？」

珍しくスープの半分以上を胃の腑に納めた王女に、侍女達は破顔して尋ねるも、王女は静かに微笑み微かに首を横に振った。そして王女はぎこちない仕草で立ち上がった。

「姫様？如何されました？」

慌てて王女に手をそえる侍女に、王女は片手を上げて鮮やかな蒼い色を指し示した。

「あの花々をご所望ですか？」

歳若い侍女の問いに、王女は微笑みと共に頷いた。侍女達はその花の元に敷布とクッションを移してやると、王女をそつとその場へ座らせてやった。

「まあ、綺麗な花ですこと。帝国では見た事も無い花だわ」

「真に．．．、わたくしも初めて見ました。何て鮮やかな色なのでしょう」

「姫様のお国では、ごく普通に見られる花なのでございましょうか？なれば幾株か持ち帰って、帝都にも咲かせましょうか？もしも姫様のお気持ちをお慰め適うならば．．．」

指先でそれらの花を愛でながら、王女は微笑み頭を横に振った。

「真でございますか？姫様の漆黒の御髪おくしには、その鮮やかなお色はとても映えますのに」

一番年若な侍女が笑顔で言うや、手をついと伸ばしてその花を数本手折ると、まとめて王女の黒髪の元にそつと翳した。背に垂らした王女の張りのある絹糸の様な黒髪に、その鮮やかな蒼い色は確かに良く映えた。

「まあ、真に良くお似合いになりますこと。姫様の艶のある黒い御髪おくしには、大抵の色は映えましようとも、殊、鮮やかな蒼い色の何とお似合いになる事でしよう」

「やはり幾株か持ち帰りましょう。こんなに愛らしいお花ですもの。まるで一つ一つのお花が小さな鐘の様ですわ。帝都に着いたらエドキス様にお願ひして、早速この様な色のお衣装を誂えて頂きましょう。そしてこのお花を御髪に飾ったら、さぞかしお似合いになりますわ、姫様」

敵国の女達の言葉に、口をきかぬ王女は微笑むだけであつた。

やがて侍女等が立ち上がり出立の為の準備を始めた時、亡国の王女は侍女等の目を盗んで件の蒼い花を懷に隠した。

その晩、アルデイスはいつまでも寝付く事が出来なかった。脳裏に散らつくのは、あのフェリスの王女の哀れな姿ばかりであった。鏡の欠片の深々と食込んで深紅に染まっていた掌……、細い首にくつきりと残った赤黒い縄の後……、そして……、舌を噛み切り言葉を失った絶望の表情。出来る事ならば死なせてやりたかった。フェリスの王女としての誇りと共に、死なせてやりたいと思った。

アルデイスは観念して暗闇の中を起き上がった。傍らの愛剣を手に取り天幕を出ると、眠そうな衛兵達が咄嗟に居住まいを正した。

「眠れない。その辺を散歩して来る」

「なっ、なれば殿下っ。お供仕ります」

「必要無い、すぐに戻る」

「しかし、こんな夜更けです、殿下。何が起こるか分かりません故、それに、その様なお姿では……」

アルデイスは鎖帷子も着けてはいない姿である。寝ずの衛兵達が良い顔をしないのも当然と言えば当然であろう。

「好きにしろ」

アルデイスは小さな溜息と共に言うと、何処へとも無く歩き出した。野営の篝火が所々に燃えていた。エドキスの天幕を守る兵達が、アルデイスの姿に気付き姿勢を正す。これと言って驚いた態でも無かった。第五皇子の気紛れなど別段珍しくも無い。取りあえず後ろに二人の兵達が付き従っているのを見て、口を開く事は差し控えた様である。

アルデイスは長剣を片手にぶらりと歩き、やがて足を止めて木々に切り取られた夜空を眺めた。月が明るく、星が瞬いていた。

「明るいな……」

ぼつりと呟いてみた。

「はい、今宵は満月です故、殿下」

兵の一人が朗らかに答えた。

「そうか．．．、そう言えばそうだったな」

「アヴィエス月が痩せ細る頃には、帝都ですね、殿下」

その言葉に、アルデイスは気の無い返事を返す。

「嬉しく無いんですか？殿下」

「いや．．．、そんな事は無いが．．．」

微かに驚く気配を見せた兵達に、アルデイスは言い淀む。本心では、嬉しいなどとは感じられなかったのだ。このまま何処かへ出奔してしまいたい気もする。総てをかなぐり捨てて、何処か遠くで傭兵家業でもしながら気ままに暮らすのも良いかもしれないと、幾度考えたかしない。それを実行に移さないのは何故だろうと、アルデイスは改めて考えてみる。エドキスのせいであろうか．．．．．。

「お前達には、故郷くにに待たせている者達がいるのか？」

アルデイスが、何とはなしに尋ねてみると、二人とも嬉しそうに頷いた。

「女房と、六歳になる息子がおります」

「私は、母と妹が」

「そうか．．．、さぞ、お前達の帰還を首を長くして待つてるんだろうな」

アルデイスは微かに微笑んだ。

そんな夜更けの和んだ雰囲気突如、女の甲高い悲鳴が遮った。

三人の男達は、同時に息を呑んだ。真っ先に駆け出したのはアルデイスであった。フェリスの王女が、又自害を企てたのだと確信した。

「御医師をつ！早うつ！！」

王女为天幕の前で、侍女が叫んでいた。駆けつけたアルデイスは、その侍女の腕を荒々しく掴んで問い詰めた。

「姫様のご様子が、ご様子がつ！」

動転する侍女の言葉は、要領を得ない。アルデイスは素早く王女

の天幕に飛び込み、獸脂の蠟燭の灯りに浮かび上がるその光景に目を見開いた。寢台の上の王女は、酷く悶え苦しんでおり、白い夜着の胸元や袖口、そして掛布に紅い色が散っていた。両側から侍女達が叫びながら、酷い苦しみ様の王女の背を必死に擦っていた。

「どうしたんだっ!？」

アルデイスの詰問に、しかしこの二人の侍女等も同様に動転しており、年若な侍女の方は既に泣き出していた。アルデイスの脳裏に、昼間見たあの鮮やかな蒼が思い浮かんだ。

「どけっ!」

アルデイスは二人の侍女達を押しのと、王女の身体を後ろから掴んだ。

「あの花を食ったのかっ!？馬鹿な事をつ!吐けっ!吐くんだっ!」

血相を変え叫びながら、苦しむ王女の血を垂れ流す口に己の指をつっこもつとしたアルデイスに、突如王女は抗った。弱った王女の、死の苦しみの中の王女の、何処にそんな力が残っていたのか……。呼吸もままならぬ態で血反吐を吐きながら、王女は苦しみに濡れた濃紺の瞳でアルデイスを見上げ首を振る。その口が不明瞭な音を紡ぐ。

「い．．あ．．え．．い．．え．．い．．え．．」

王女は、ぶるぶると痙攣する腕を伸ばしてアルデイスの胸元を掴み、縋り付く。

「お．．え．．が．．い．．」

王女の紅く染まった口は、それらの音を幾度か紡ぎ出すと、再びごふりと血反吐を吐き出した。

シナセテ．．．．オネガイ．．．．

寢台の隅に、あの花の茎と毒々しい鮮やかな蒼い花びらの欠片が落ちていた。南国では、珍しくも無い毒花であった。俗に“シエル

シアータ（美の女神）の吐息”との名で呼ばれるその猛毒花は、あまりの苦しみをもたらす為に、フェリスなどでは極悪人の処刑に用いられるという毒花である。その事をフェリスの王女が知らぬ筈は無かった。全身を炎で焼かれるよりも尚恐ろしい苦しみを味わう事になると知りながら、王女がそれを飲み込んだのかと考えたらアルデイスはいたたまれなくなつた。敵の胸に縋り付きながら、死を懇願する王女が哀れであつた。身も心もぼろぼろになり、血反吐を吐き散らしながら呼吸も満足に出来なくなっている王女が、あまりに哀れであつた。アルデイスの片腕は、酷く痙攣している王女の肩を抱き寄せていた。

「分かつた．．．、今すぐ楽にしてやる．．．」

アルデイスは王女の耳元に囁くと、苦しむ王女をそつと寝台に横たえた。その時、彼の瞳から雫が一滴王女の頬に落ちた事に、彼自身気付いていたであろうか．．．。そして彼は剣を抜いた。アルデイスに付き従っていた兵等が仰天して声を上げたが、アルデイスは聞き入れはしなかつた。この王女を殺す事によつて生じるであろう問題など、どうでも良かった。咎めを受ける事になるうが、かまわなかつた。ただ哀れな王女を、これ以上苦しませるのが忍びなかつたのだ。アルデイスは王女の急所を定めると一気に貫いた。侍女が一人、気を失い倒れ込んだ。

王女は心の臓を一撃に貫かれ一瞬の後に動かなくなつた。ただ、その口元が確かに、“ありがとう”という形に動いたのを、アルデイスは見逃しはしなかつた。

フェリス王女殺害について、アルデイスは何の申し開きもしなかつた。エドキスに状況を説明したのは、王女に付けられていた侍女

達と、アルデイスに付き従っていた二人の衛兵達であった。

「全く．．．、お前には呆れる。王女を哀れんで殺したか？滅ぼした国の者達を、いちいち哀れんでどうする？馬鹿者が」

エドキスは声を荒げる事はしなかったものの、苦々し気な表情で弟を詰った。

「いつまでそんな“甘ちゃん”でいるつもりだ？」

アルデイスは、一言も発する気は無いのか、ふいっとそっぽを向いた。エドキスは苛立たし気に息を吐いた。

そして、月の女神の姿が細くやせ細った頃、エドキス率いる軍隊は帝都に帰還した。

フェリス王国の姉姫の死の真相は、エドキスにより巧妙に隠され、毒花摂取による自害として片付けられた。エドキスは、事の真相を知る者達に対し箝口令を敷いていた。

『事の真相が洩れた時には、お前達全員の命は無い物と思え』

第四皇子の酷薄な瞳に睨みつけられた三人の侍女達と二人の衛兵達、そして医師達は、文字通り震え上がった。帝家の皇子達の中で、一番残虐な気質を持つ皇子として怖れられている第四皇子である。事が洩れれば、本当にその場にいた者達は皆消されるのだらう。口封じの為にその場で消されなかっただけましであると、その場の誰もが考えた。

帝都帰還後、三人の侍女達はその責任を問われ謹慎処分に処されたが、その内の一人は精神的な打撃が大きかったらしく、そのまま城を辞した。

クルトニア帝国滅亡の、僅かに二年前の出来事であった。

2・帝国の皇子達(5)

十五になる帝家の末姫は、白っぽい金髪に翡翠色の大きな瞳をした、中々に愛らしい姫であった。物心付く前に母を亡くしていたが、父である皇帝には溺愛されて育った。末姫以外の七人の子等に対し、この皇帝が父親として接した事など皆無に等しかったというのに……。寵姫の産んだ娘だからか、それとも皇帝も年老いたという事なのか……、娘を愛でる皇帝の姿に、周りの臣達は影でそのように取り沙汰する。

だが実際に末姫は、幼い頃より人見知りをする事も無く誰にでも可憐な笑顔を振り撒いたので、多くの者達に愛された。

「エドキス兄さま、アルデイス兄さま」

兄弟の私室に、愛らしい顔がひょっこりと現れた。長椅子で私的な書簡に目を通していたエドキスは、溜息を一つ零して妹の顔へと目を向けた。

「またお前か。何の用だ？」

にこりともしない兄に、それでも末姫ラモーナは屈託無い笑顔を見せる。

「この処、ちつともお会い出来ないから、来てしまいました」

窓辺の長椅子に足を投げ出して本を開いていたアルデイスは、微笑かに笑みを見せていたが、エドキスと言えば、苦々し気な表情に拍車をかけたまま再び手元の書簡に目を落とす。

「十日程前に、会ったと思うがな」

「あら、十日も前よ、エドキス兄さま。しかも歩廊ですれ違った

だけですわ」

「充分だ」

エドキスの冷たい言葉に、ラモーナの愛らしい笑顔が微かに翳る。
「たまには一緒に夕餉をと思って、お誘いに來たのよ、お兄様方」
「お前はいつも陛下と共に夕餉を摂るだろうが」

「ええ、だからお父様もよ」

「冗談だろう．．．」

エドキスは、年齢よりも幼く見える妹の笑顔を見上げた。

「お前は、本当に帝家の人間とは思えないな、末姫」

ラモーナはきょとんと首を傾げた。

「私達に、家族の真似事でもしろって言うのか？」

「エドキス」

エドキスの棘のある言葉を、アルデイスが咎めた。

「陛下の夕餉の相手は、お前一人いれば充分だ。その方が陛下も喜ぶさ」

「エドキス兄さま．．．」

「用が済んだなら出て行け。それから、十五にもなって供も連れずに男の部屋にずかずか入って来るんじゃない。分かったな、末姫」

「．．．はい．．．、ごめんなさい、兄さま．．．」

ラモーナはしゅんと萎れて、とぼとぼと部屋を出て行った。その背を見送りつつアルデイスは立ち上がると、エドキスを睨んだ。

「どうしてお前は、いつも末姫に冷たいんだ？」

「私は、ガキが嫌いなだけだ」

「．．．．．」

悪びれもせずに答えるエドキスを忌々しく思いながら、アルデイスは素早く身を翻すと妹を追って部屋を出て行った。

哀れな程がつくりと肩を落として歩いているラモーナを捕まえると、アルデイスは小さな肩を抱き寄せた。

「気にするな、ラモーナ」

「エドキス兄さまは、私の事がお嫌いなのか？」

泣きそうな顔で見上げて来るラモーナが哀れになる。

「エドキスは、ああいう性格なんだ。誰にでもあだ。お前にだけじゃないから、気に病むな。部屋に来たかったら、好きな時に来ていいんだぞ。エドキスが何か言ったら、俺が来いって言ったって言え」

アルデイスに頭を撫でられ安心したのか、ラモーナ姫は笑顔を取り戻した。アルデイスは、妹姫の屈託も無い話に合づちを打ってやりながら部屋まで送り届けると、自室へと戻った。

アルデイスが部屋へ戻ると、エドキスが皮肉気な瞳を容赦無く向けて来た。

「又、部屋まで送ってやったのか？」

「ああ」

「全く、甘やかし過ぎだ。十五にもなりながら、まだてんでお子様じゃないか。あんなんで、政略の材料になるか」

「いいじゃないか、あれはあれで可愛い」

「やれやれお前まで、呆れたもんだ」

「もう少し、優しくしてやってもいいんじゃないのか？泣いてたぞ」

「無理だな、私はあの姫が嫌いだ」

だが、その理由をエドキスは口にはしなかった。アルデイスもそれ以上は何も言わず、ただ溜息を吐いたまま先程の本を手にとると、長椅子に戻って再び繻き始めた。

夕暮れ時であった。独りになりたくて、供も連れずに彼は帝城の広い敷地内を歩いていた。昔よく通った早道を選び、懐かしい場へ

と辿り着いた。

長らく使われる事の無かったその離れの館は、うらぶれた感が否めなかったものの、そのごんまりとした庭園だけは、驚いた事にあの頃と変わらず、今でも美しい花々が処狭しと咲き誇っていた。まるで、あの頃に時が戻ってしまったかの様な錯覚さえ受ける。

初めてあの儂気なシルキアの姫に出会った日の光景が、エドキスの脳裏にまざまざと甦る。あの細い歌声が、哀し気な旋律が、甦った。シルキアの姫が亡き人となり、彼女の忘れ形見を自分の手元に引き取ってから、ついぞここへ来る事は無かった。あれから十年以上の月日が流れた。未だ自分はその姫の面影に囚われているのかと思っただけおかしくなり、エドキスは独り自嘲的な笑いを漏らした。ふと末姫の事が心に浮かんだ。なぜ冷たくするのかと、アルデイスに詰られた。誰あるうアルデイスに責められた。確かに子供じみた真似である事は自覚している。末姫に罪は無い。罪深いのは父である皇帝だ。もしも．．．、とエドキスは考える。もしも皇帝が末姫と末姫の母を思う心の内の五分の一程でも、ルウィーラとアルデイスを気遣ってくれていたなら、ルウィーラは気が触れる事も無かったかもしれないと．．．。だがそれも、今更口にしてもせない事だ。

エドキスは、時折花に触れながら歩いた。

ここ数年、大陸には再び不穏な空気が流れていた。その一端を担っていたのは、無論この帝国であったのだが．．．。

（又、戦が起きるのだな．．．。）

皇帝は、以前から北国メインデルトの地を手に入れたがっていた。その為、メインデルト王女とエドキスとの政略的な結婚が画策されて来たのだが、メインデルトはあの手この手でそれを拒み続けた。それ故エドキスは、二十五を過ぎて尚、一人の妻も娶ってはいなかったのである。

東の地で戦の避けられない事変が起こると、帝国からも再びのんびりとした風潮は拭い去られた。皇帝が今日明日にでも、メインデ

ルトへの遠征を命じたとしてもおかしくは無くなって来ていた。そして侵略の暁には無論、王女はエドキスが娶らされる事になるであろう。

「冗談では無いっ」

エドキスは、吐き捨てた。

「ルウィーラ姫と同じ境遇の姫など、冗談にも程がある」

知らず知らずの内に、手が近くの花を鷺掴みにしていた。皇帝が正式に命を下したとしたら、自分は従うしか無いだろう。それとも国も身分も捨てて、何処かへ逃げるか……。たかが、意に染まぬ婚礼の為に総てを捨てるなど、馬鹿馬鹿しい。

独り苛立ちながら花を握り潰していると、ふと人の気配を感じた。エドキスは不思議に思い振り返ると、恐らくは庭師であろう、年老いた男が庭ばさみとバケツを手に見れた。庭師の方でも、ここに誰かいるなどとは予想していなかったと見え、エドキスの姿を認めると酷く驚いた様子で慌てて深々と頭を下げたが、まさか皇子だとは思わなかったのだろう、さっさと己の仕事に精を出し始めた。エドキスは暫くの間、その庭師の様子を目で追っていた。雑草を抜き、涸れた花を摘み、植え込みの伸び過ぎた部分を綺麗に刈り、庭師は黙々と働いていた。

「主のいないこの庭園を、お前はずっと世話してきたのか？」

突然話しかけられ、庭師はびっくりした様に顔を上げた。そして、「はい」と頷き答えた。

「何故だ？愛でる者もないのに」

「主がおらなんだとも、愛でる方がおらなんだとも、花や植木達には罪はございません。ここに植わっているなら、世話をしてやらにやあ、可哀想です」

「.....そうか...」

エドキスは、微笑んでいた。それは、いつもの彼特有のあの皮肉を帯びた笑みなどでは無く、滅多に人に見せる事など無いであろう、

純粹な微笑みであつた。

「お前に礼を言おう。この庭園をずっと世話してくれて、本当に忝い」

それは、彼の心からの言葉であつた。庭師は、顔をくしゃくしゃにして笑顔を見せると、再び深々と頭を下げた。

北国メインデルト遠征の件が決議され、皇帝が正式にエドキスに命を下したのは、それから数日後の事であつた。

「こうなるとは思つていたが、こんな時期に、よりよつてメインデルトとは、鬼の様な父だな」

アルデイスと共に私室へ戻るやエドキスは軽く毒突いた。

「メインデルト．．．．．」

アルデイスは、ぼつりと呟いた。

（よりよつて、メインデルトとは．．．．．）

彼の脳裏に、金色のふわふわの髪をした幼い少女の面影が甦つた。
「でもつて、あの王家の男子を一掃した暁には、私にあそこの王女を孕ませる権限が与えられるつてわけか」

エドキスは、皮肉氣に口を歪ませ、低く笑つた。

「全く冗談じゃない。あそこの王女は、男装で剣を振り回す様な姫だと聞いている。いつ寝首をかかれるか分からないじゃないか」

エドキスは、二つの銀杯に葡萄酒を注ぐと片方を弟へ手渡した。

アルデイスは、杯を受け取ると、長椅子に座り背を預けた。

「侵略して滅ぼしたら、エドキスが王女を娶るのか．．．．．」
アルデイスは、まるで独り言の様に呟いた。

「ああ、攻め滅ぼす事が出来たらな。すると私は、お前の母と同じ境遇の女を妃にしなければいけないくなるわけだ」

「何故王女の後見人が俺なんだ？何の力も無い俺を付けて、何の

意味があるんだ？」

「戦利品に力ある後見人など必要無いって考えだろう、お前の母がそうだった様に……」

エドキスは皮肉気な笑みを浮かべたまま、アルデイスから目を背けた。

その後、間も無くして、兄弟は軍を率い帝国を後にする。二度と故国へは戻れぬ事も知らず……。

2・帝国の皇子達 終

3・第四皇子の独白／エピソード

父である皇帝から、北国メインデルトへの遠征の命が正式に下ってから、アルデイスの様子が少しおかしい。もともと口数も少なく、笑顔を見せる事も少なかったが、この処頓に沈んでいる。その彼の微妙な変化に気付く者は、恐らくは他にいまいが、生まれた時から彼を見て来た私の目は、ごまかされはしない。戦を前にして気が張っているというのとも違う。そもそも初陣でもあるまいし、あのアルデイスがその為に緊張するとも思えない。一体何があつたのかは、分からない。尋ねたところで、あの頑な弟が、私に理由を話すとも思えない。

季節はもう、夏を終えようとしているというのに、父は我々に冬の厳しい極北のメインデルトを早急に落とせと言う。そして私にその国の王女を娶る様に命じた。ここへ来て尚、父は私にかの国の王女を妻めあわせたいのかと思うと無性に腹が立って来る。しかも国を滅ぼしてから王女を手に入れると言う。

私は、ふと考えた。もしもメインデルトが落ちたら、アルデイスは又いつかの様に戦利品とされる王女に手をかけるであろうか．．．と．．．。父は激怒するであろうが、私はそうなるうとも構わないと考える。敵国民の感情を逆撫でする事になろうとも、構うものか．．．。戦に憎しみは付き物である。アルデイスが戦利の証とされる女達を死なせたがる気持ちも分からなくは無い。彼の母であるルウィーラ姫の境遇を思えば、それは当然とも言える事なので

あろう。

ルウィーラ姫の呪詛の言葉．．．．．。気の触れた己が母親の、己が父を呪う言葉を聞きながら、あの哀れな弟は成長したのだ。願わくは、将来彼の妻となる女が戦利の証などでは無い事を私は切に祈る。私の望みは、ただそれだけである。そう．．．、只それだけなのである．．．．．。

帝国の皇子達 終

3・第四皇子の独白／エピローグ（後書き）

こんな陰気な話に最後までお付き合い下さった皆様、本当にありがとうございました。

今度は明るい話を書きたいものです。などと思ってみても、性格が陰気なせい、物語も陰気になってしまっていますね、やれやれ……。

それでは皆様の御幸運を祈って……

秋山らあれ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8346d/>

帝国の皇子達

2010年10月11日23時19分発行